
along the way to her

れもすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

along the way to her

【Nコード】

N4944K

【作者名】

れもすけ

【あらすじ】

「over again」本編を補う、主人公以外の登場人物視点です。単体では意味不明なので、本編とあわせてお読み下さい。

鼻歌混じりにスキップしながら小道を抜けてくる奥さんの姿に、ヒロは小さく苦笑した。

祖父と同じような年代の大人に囲まれて育ったという彼女は、ふとした仕草がとても子どもっぽくて可愛い。

汚いものなどにも知らないようなその笑顔を見るたびに、ヒロは何度でも彼女に恋をする。

彼女が本当に無邪気だからではない、理不尽も不条理も知っていてなお、心からの笑顔を失わない彼女が眩しくて愛しくてならないから。

——あの様子では、馬車を湖畔に置き去りにしてきたことも忘れてる。

ヒロは込み上げるあたたかな気持ちに身をまかせ、可愛くて大切な女性を迎えるために玄関へ向かった。

「ジエイル殿下が？」

風に曝されて冷えた身体を温めるホットミルクを飲みながら、ジエナはこくんとうなずいた。

「城を出る前、中庭でお会いしたの。ヤヨイにもできる仕事を用意

したって突然おっしゃるから、びっくりしちゃった。グレイヴ殿下がここへ来るの、てつきりあなたを説得するためだと思ってたわよ」くるりと目を回すジェナに、ヒロも同じ気持ちでうなずいた。

どちらかという时无口で愛想もなく、他人を寄せつけなかった孤独な王子が『外』の娘に恋をした。

きっかけを与えたのは自分だし、その瞬間を目撃もした。どこか投げやりで空虚なばかりだった紺色の瞳に光が灯り、見る間に燃え上がる。だれかが深く恋に囚われるところなど初めて見たけれど、そのときの鳥肌が立つような感動は忘れられるものではない。

まして幼い頃からよく知る少年。照れ屋で感情表現が下手で、大切なものを大切だと口にするこすらすできない臆病な子だった。自分に心を開き、不器用ながらも慕ってくれていると知っていたのに、あの広大で寂しい城に置き去りにしてしまった。

あの娘を妻にしたい、と言った。

多くのものを望まぬままあきらめてきた彼が、心から願うなら叶えてあげたいと思った。けれどその傍らで、つきまとうてきた後ろめたさを振り払うチャンスだ、とも思った。

ヤヨイのためにもその恋を手放して応援してあげたかった。だれかに心から愛され、求められることは自分を守り、肯定していくためにとても有効なことだから。

だが、あの王子の立場は微妙すぎる。少なくとも、まだこちらの事情に明るくないヤヨイを託すわけにはいかなかった。

——でもジェイル殿下なら。

ヒロは王の次男を思い浮かべた。

光の淹みたいな金色の髪、深層を覗かせない青緑色の瞳、線の細い美貌。ちよつとかわり者だが頭はいいし、それだけに多少の奇行なら周囲は気にもとめない。

落ち着くまで預けるには申し分ない相手だ。グレイヴには悪いが、ひとまず涙を呑んでもらおう。

きつと全身で不本意だと訴えているにちがいない。

端麗な顔がむつつりと歪む様を想像してくすつと笑うと、カップをすぎに席を立てていたジェナが振り返って首をかしげた。

「なあに？　楽しいこと？」

「うん。若いつていいなあと思つて」

「ヒロだつて若いじゃない」

あきれたように眉を上げるジェナに、ヒロは苦笑いを見せる。

「三十過ぎたら年寄りでしょ？　君の基準は学者連中だからなあ」

ジェナは否定しなかった。それはそれでもしろくないが、二十三歳の彼女にしてみれば、九歳も年上のヒロは本当におじさんなのだろう。平均寿命が六十歳前後のこちらでは、既に人生後半戦だ。

俺も年とつたなあ……と、妙に感慨深くなる。ヤヨイと話すと特にそう思う。

ドリームキャストってなに？　となにか同情するような目で見られたときは、死にたくなつた。

かすれかけた景色を思い出す。

油で汚れたテーブルの居酒屋。ドリンク一杯で居座つたカラオケボックス。先輩のお下がりのスポーツカー。ボールが見えなくなるまで草野球に興じた河原。どうでもいいことを語り明かした夜明け。教授の講義を子守唄にした教室。時折届くダンボール箱に詰まつた母の真心。友人と格闘ゲームをしていたはずなのに、いつの間にか本物の殴り合いになつてぶち抜いたアパートの壁。

懐かしくて遠い故郷。なにかも嫌になったはずだったのに、なぜこんなにも優しく呼びかけてくるのだろう。

ヤヨイもいつか、こんな気持ちになれたらいい。まだ癒えぬ傷が彼女を苦しめていることは知っているけれど、それでもいつか。

沈みそうになる気分をかえて、ヒロは椅子に寄りかかりながらふと尋ねた。

「それで、ジェイル殿下が用意してくれたのはどこ？」

ああ、と思い出したように言って、ジェナは椅子に座りなおした。
「書記室ですって」

その瞬間、呼吸がとまった。

「——え？」

「城での暮らしに慣れるまでは、書庫の整理をさせるって。読み書きが不自由なヤヨイに公的文書は扱えないから、まあ正式な書記官ではないわよね。でもグレイヴ殿下のいるところからも近いし、見てきたけど静かな環境でよさそうよ。それにあそこの連中は安全じゃない？」

よかったよかったと微笑むジェナから目をそらし、ヒロは急速に血の気の引いていく頬を引きつらせた。

書記室——よりによって！

腹の中に大きな石を飲み込んだような不快感に、低くうめいた。だが訝しげに顔を覗き込まれ、彼女を安心させるために無理に笑った。

「そう……ジェイル殿下には感謝しないかね。後で手紙を書くよ」

「……ヒロ、なにか心配なことでもあるの？ 顔色が悪いわ」

不安げに透き通った青の瞳を揺らすジェナに、ヒロは答えることができなかった。

はつきり言つて、書記室だけは勘弁してもらいたかった。

安全？　よかった？　あの室長に近づけるのが！？

しかし苦手な兄に頭を下げたグレイヴの顔をつぶすわけにもいかないし、断るためには室長との確執を話さなければならない。それはとりもなおさず、蓋をした六年前の件を再び目の下に曝すということだ。それだけはしたくなかった。だがヤヨイを託すのに、世界中のだれよりもあの男は適していない。

刹那に噴き上げた葛藤。なにを考え、どう口にすべきか本当にわからなかった。

ジェナは六年前の真相を知らない。そしてあのとき亡くなった女性に、いい感情を持っていない。彼を思つてのことだが、いまさら事情を説明して心痛を与えたくなかった。

「いや……大丈夫だよ。ジェイル殿下のことだから、おもしろがつて手元に置くんじやないかと思つたから、意外なだけ」

顔を見ることができないまま、ふるえる声でどうにかそれだけ言つた。なにかを誤魔化したことは気づいただろう。彼女はヒロをよく理解している。そこに自分が触れる余地がないことを悟つたはずだ。

ジェナは数拍の間ヒロの目を見つめたが、小さくうなずいて笑みを浮かべた。

「そうね……あのジェイル殿下だものね、そういえば意外だわ」

肩をすくめる仕草はぎこちない。彼女を傷つけている、罪悪感に胸が痛んだ。

「あ、帰ってきたわ。——ちょっと！ ちょっとちょっと、手なんかつかないじゃって！」

はしゃいだ声を上げて、ジェナは窓辺に駆け寄った。

泣いてるんじゃないかな。

ヒロは身を乗り出して大きく手を振る妻の後ろ姿に、いまだけは慰める資格もない自分を呪った。

第二章 1・5

～ ロード ～

ランドボルグ城の王宮に絨毯はない。

総石造り、築城より三百年余、かつて戦乱の世においては鉄壁の守備を誇った巨大要塞。時代がかわり、オージェルムが統一されて戦禍より遠ざかった現在も、この城は民の祈りと誇りの象徴だった。

幾層にも分かれた王宮内は、刺客や敵襲に備えて複雑な構造になっている。

主に役人や使用人がせわしなく行き交う下層は昔の名残で壁に開いた銃眼から雨雪や砂が入り込むし、何百何千の足に踏まれ続けて石の床ですら磨耗している。

国王に仕える側近や軍幹部、大臣^{たいしん}たちが拠点を置く上層は、そもそも装飾を必要としていない。客を迎えるなら下層で十分だし、眺めて楽しむだけのものに金銭を投じる趣味のある王家ではなかった。数年おきに張り替えなくてはならない絨毯など、この城では無用の長物だ。砂や泥、稀には王によって飛ばされた首から迸るものの汚れを落とす面倒を考えても、あるだけ厄介な代物だった。

「だが何事にも例外はある」

低いつばやきに、前を歩いていた騎士が振り返る。背後の者も耳をそばだてているだろう。

探るような視線を無視して沈黙を守ると、訝しげに眉を寄せながらも顔を戻した。それでいい。彼らの仕事は太子の護衛であって、楽しいおしゃべりにつきあうことではないのだから。

が——つまらない奴。

ロードは規則正しい歩調を保ちつつ、よく鍛えた広い背中を眺める。

これが末弟のグレイヴなら、気味が悪いから独り言はやめると苦情を申し立てるところだろう。しかし一介の近衛に実の兄弟と同じ融通を求めるのは酷だし、そうするべきでもなかった。

ふと、以前の近衛騎士隊長を思い出す。

ロードも感嘆するほどの美丈夫で、親父殿が手放しに褒めちぎる剣上手。金茶色の髪を悠然となびかせ、金緑色の瞳にどこか仄暗い光をたたえた荒野に棲む獰猛な獣のような男だった。

若い頃から気の置けない友人と称してよい関係だったが、どこか飄々として本心を見せないところがあった。

いつもくだらない軽口を叩き合い、どうでもいいことで殴り合い、爺どもが眉をひそめるような遊びの共犯者でもあった。

王になり、年をとり、死の床についても傍にいたいと思っていた。漠然と、彼だけは絶対に自分から離れてはいかないのだと。幻想だったわけだが。

上層の東、塔へ続く狭い階段は右回りの螺旋を描いて伸びていく。右利きの人間が抜剣しにくく、また剣を振るいづらくするためだ。上階からもれ落ちる陽光が前方を照らし、背後を闇に沈める。

やがて広い廊下の端に出ると、騎士は西に向けて先導した。ほどなく櫺のドアの前に立って歩みを止め、数歩下がって頭を下げた。黙って壁際へ身を寄せる騎士に一つうなずき、ロードはコン、と申し訳程度にノックをして、返事も待たずに扉を開けた。

案の定、部屋の主は窓辺に敷いた絨毯の上に、淡い金髪を撒き散らかして眠っている。絹のクッションを抱え、日向で猫のように丸

くなつて。

「……起きろ。執務室で堂々と寝るな」

入り口から呼びかけるが、弟が目覚める様子はない。

だ始業の鐘からいくらか経たない時分だというのに、その唇から
もれる寝息は深くゆったりとしている。

「ジル」

続けて幾度か名前を呼んでも、目を開ける気配はなかった。ロードは短く整えた金の髪をくしゃっとかき上げ、ため息をついた。
もしかしてここで夜を明かしたのか、と思いつく。

ずかずかと部屋の中へ入り込み、靴のまま赤い絨毯を踏みつける。
蔓草と小鳥が描かれたそれは毛足が長く、上等な品とは知れるが、
決して寝具としてこしらえられたものではないはずだ。第一、石の
床にこんなものを一枚敷いたところで、ぬくもりも心地よさも得ら
れるわけがない。

くー、という平和な寝息を立てる弟を見下ろし、ロードはもう
一度ため息をつく。夜は冷え込む時季だというのに、上掛け一つか
けないで。

おもむろにジェイルの傍らに膝をつき、彼が頭を載せているクッ
ションを思い切り引き抜いた。ゴンとジェイルの側頭部が音を立て、
「だっ！！」と奇妙な悲鳴が上がる。

「おはよう、ジル」

「……兄上」

その青緑の瞳に込められた非難は見ないこととして、ロードは
絨毯の上に胡坐をかいた。膝の上に肘をつき、床に側頭部をぶつ
けたままにいる弟に言った。

「今日からあの娘が登城しているそうだな」

「……そうかもね、よく知らないけど。グレイヴに聞いたら？」

他人からの評価に神経を細くする割りに、仕事の成果や手柄を誇ることができないところは相変わらずだ。そのために徹夜する羽目になったのだろうに、不器用な奴。

ロアードは床に押しつけるようにしてジェイルの頭をなで、絹糸のような金の髪をかき回した。

「ちよっ、いたっ！ 兄上！ …… もー」

わざとらしくのろのろとした動作で起き上がったジェイルは、頭をさすってうなつた。

「コブになつたじゃないの」

正面から朝陽に照らされた弟の目の下には、くつきりとした隈がある。

唇は乾き、頬はこけ、それでもだれかのために苦勞している、とは口にしないのだ。ならばロアードも、気づかぬ振りをしてやらなくてはならない。

「おまえの下につけたのだろう、 그레이ヴは無関係だ」

「下ってほんと遙か下だけど。それにそれ言ったらあの子、地団駄踏んで怒り出すよ？ 泣く泣く、嫌々、仕方なく僕を頼ってきたんだから」

「まさか。おまえじゃあるまいし」

むっと眉尻を上げるジェイルの顔を見ながら、地団駄くらい踏みがいい、と思う。

熊のような大男たちに囲まれて、遠くから家族を見ていた弟。髪の色くらいでなんだと言えるのは、自分が王家の証を持って生まれてきたからだ。幼い 그레이ヴが抱いた疎外感など、一生涯理解できるものではない。

あの弟が恋をした、と聞いたときの衝撃は、自分の近衛になると聞かされたときのそれを超えた。しかも相手の娘を嫁にほしいとこ

ねたという。

いいことだ。妙に悟った若造など可愛くない。
もつと感情に振り回されて、素直になることを覚えればいい。

表情を動かさないまま、しんみりと感傷に浸る。

以前「三十過ぎて湿っぽくなっちゃったんじゃないですか」などと『外』の男に凶星を指されて反論をし損ねたが、そういえばあの男は同じ年だ。してみるとあれは、あの男の実感か。

ロードはどうでもいいことをつらつらと考えながら、仲違いした二人の友人を頭の中で握手させてみたりした。ありえない光景に過ぎて虚しくなった。

「兄上……楽しいなら笑うし、悲しいなら泣いてみようよ。生まれたときから無表情みたいな兄弟に挟まれて、僕って不幸。怒ってわめく分、グレイヴのほうはまだマシだけど」

絹のクッションを腹に抱え、顔にこぼれ落ちる髪をかき上げるジエイルは無意味な色気を振り撒いている。

だが彼が赤ん坊の頃におむつをかえてやっていたロードは、容赦なくさらりとした髪を引っ張った。

「城に部屋を与えなかったそうだな。ヒロからはこちらで頼みたいと言われていたように思うが」

「ああ……。だって、そんなことしたらグレイヴってば、嬉々として夜這いに行きそうな勢いなんだもん。弟に先超されて子持ちになられたら、まるで僕がモテないみたいじゃない？ ゼロンの生家に預けたよ、年寄りだけで心配だって言ってたし、若い女の子がいればあのあたりも活気づくでしょ」

髪を引っ張られるままあふ、と欠伸をもらす弟に、ロードは首をかしげた。

「ヒロは承諾したのか？」

彼が眉を上げて肩をすくめるのを見て、これは押し切ったなど内心であきれた。ヒロはグレイヴの恋路をやけに応援している風だったから、相談しても無駄だったろう。強権発動で黙らせたにちがいない。

「庶民の生活を知るのもいいでしょ。見聞を広めるためにはさ」

「ものは言い様だな」

「まあまあ。実際悪くないと思うよ、ゼロンの家。老いたりとはいえ、元警備隊の猛者イゼ爺もいるわけだし。ロマ婆からお料理習ってもいいし。もしお嫁に出すにしたって、ちゃんとした後見人はいたほうがいいでしょ？」

相手がグレイヴであろうとなかろうと、と言って微笑んだ弟は、自分の仕事に満足しているようだった。彼がそう言うのであれば、きっと現時点で最良の手だったのだ。

だがこの弟は、常に他者には見せない札を握っている。そして本音と建前をこれほど綺麗に使い分ける者を、ロードはランドブルグで他に知らない。とすれば、その形よい唇から紡がれる耳に心地よい理由だけがすべてではないはずだ。

ジェイルは派手な外見と奇行の裏に、優れた資質を隠して持っている。自分の足元が磐石になった暁には——と、ロードはそう遠くないはずの未来を思い描く。それまでは、弟たちが不遇をかこつ傍らで高みを目指さなければ。薄情に見えたとしても。

まだ眠たげに緩く瞬きする気の抜けた横顔からは、冷徹な計算など一欠片も読み取れない。

ロードは気取られぬように息をつき、弟の調子に合わせた。

「いずれにせよ、グレイヴの軽率な行動を未然に防げるのなら異存

はない。騎士団の結束は固い、そこからはみ出したらあれの居場所はこの城にないのだからな」

「……兄上ってほんと、グレイヴが可愛いくてしょうがないのね」

恨めしげに上目遣いでロアードを睨むジェイルは、弟に対する嫉妬を隠そうともしていない。自分だってグレイヴが『外』の娘に会いやすいよう、あらゆる手を尽くしてやったくせに。

ロアードはほんの少し目元をほころばせ、ほつれてはねる弟の髪をさらにひどい有様にした。掌にあたる感触は、子どものころとかわらなかった。

「十二も離れていたら息子のようなものだ」

「ちよつと！ 僕だって十離れてるでしょ！ 第一、ほんとの娘が生まれたばかりじゃない！ もういい年なんだからさっさと結婚してよ、グレイヴを見習えば！！」

ジェイルは眦を吊り上げるが、ロアードの目から笑みは消えない。もともと、他人から見ればその表情の変化はごく微小で読み取れない場合が多いらしいが。

「置いたのはガルムのところだな？」

「そーだよ。あそこなら警備隊の巡回経路だし、なによりあのおじさんに噛みつく馬鹿はいないでしょ」

ロアードは書記室長の顔を思い出す。

ともに肩を並べた思い出の中で、その男は臙脂色の文官服ではなく紺色の軍服を着て立っている。自分に向ける金緑色の瞳は、いまよりもっと輝いていたような気がした。自惚れか。

「しっかり監督するように釘を刺しておけ。——いや自分で行こう、おまえは手を出すなよ」

「もーほんと、どれだけ勝手なのかな！」

がなる弟より青みの強い碧の目を窓の外に向け、ロアードは可愛

い末弟を思った。

若さを言い訳に暴走するなら、いましかないぞ、と。

第二章 1・5 〽 ロード 〽 (後書き)

本編ではあまり主人公と絡みのない王太子。

32歳独身(愛人あり)で一児のパパ。

あれ、必要なさそう・・・。

そしてゼロン、思わせぶりな四十男。

そのうち本編で出てくると思います。(多分

第二章 3 ヲルーヴェン ヲ（前書き）

時系列は目次通りで問題ないですが、内容的にはガラム編読了後をお勧めします。

第二章 3

「ルーヴェン」

六年と少し前、『外』の女性に会ったことがある。

城内に自分の店をかまえ、開店記念の祝いをしているのだと言って、通りすがりの自分にも果実酒を振舞ってくれた。彼より十五も年上なのに、そうは見えないほど若々しくて小柄で可愛い女性だった。身を翻すたびにひらりと揺れる、中身のないシャツの袖がやけに扇情的に感じた。

思えば、自分の身の裡に眠る雄を初めて感じたのはあるときだった。

やわらかそうな胸や曲線を描く尻を思い出すたびに下腹部が痛み、ようやく年かさの少年たちが熱っぽく語る「気持ちいい」この意味を知った。そして同じ感覚を同じだけの強さでもたらすのは、ここではない空に焦がれる女の眼差しだけだった。

その女はほどなく、自分で自分の首を掻き切って死んだ。

彼女を手に入れることはもう永遠にかなわないから、今度の少女に会う前から強い関心を寄せた。まして上官から「面倒を見る、手は出すな」などと指示を与えられたときは、若干ひねくれ者の自覚がある彼が、少女に対してさらなる執着を抱くのも自然なことだ。

王への謁見に臨む彼女を盗み見た日には、まさか自分の部署に配属されることになるうとは想像だにしなかった。初めて変人のジェイル王子に感謝した。

幾枚もの人の壁に阻まれて手の届くはずのなかった少女が、彼に

はにかんだ笑みを向け、よろしくと言って握手を求める。その手を握り返しただけで達しそうになる自分が、心底おかしかった。

黒い布がはためく木陰に、少女は座り込んでいた。腹の上で組んだ手の先が薔薇色に染まり、呼吸とともに上下する。

眠っているのだろうか。繊細な睫毛がわずかにふるえている。不意に、小さな唇がこらえきれなくなったように笑みをつくった。幸せな夢を見ているようだ。

身じろぎするたびに白く細い太腿の内側がわずかに覗き、その奥の影によからぬ想像をかきたてられる。

——触れたらどんな感じだろう。

突き上げる凶暴な衝動に、理性を失いかけた。

駆け寄って飛びかかり、自分の重みでその華奢な身体を押さえこんで、自由のすべてを奪ったら。美しい黒髪を泥まみれにして、むき出しの肘やふくらはぎには、擦り傷から血を流させて。

泣くだろうか。やめたと懇願するだろう。

その小さな口を手で封じ、全力で拒絶する隠された場所に容赦なく侵入したら——。

最高だ。

知らず、笑い声を上げていた。腹の底からふるえるような歓喜が沸き上がって、その想像をすぐさま現実にしない自分が愚かに思えた。

少女の伏せられていた臉が、ぱちつと開いて愕然と彼を見上げる。太陽を背に立っていたためか、彼を判別して安堵の表情を浮かべるまでに数拍の間があった。

「なんだ、ルーヴェンかあ！ 声かけてよ！」

際限なく膨れ上がるかに思えたどす黒い歡喜が、苛立ちに取って代わる。彼女は氣配だけで、いや何気なく向けた視線だけでそれが彼だと気づかなくてはならないのに。

罰を与えるべきだ。いつその場でその固い蕾をむしり散らしてやろうか。

少女にとっては理不尽な怒りだろう、だが彼の中ではまったく道筋を誤ってはいなかった。ただ衆人環視でことに及ぶ趣味がないから、そうはしなかっただけのこと。

かたわらに屈んだら先ほどの願望を叶えてしまいそうだったから、手を差し伸べて彼女を立たせた。華奢な手、これでは大した抵抗もできないだろう。暴れて怪我をして痕が残る前に、縛めてしまおうべきだ。

「ヤヨイ、昼食は？ 休憩時間を昼寝して過ごすの？」

「休憩時間になってたの？ さっきの鐘が合図かな」

ほんのわずか下から見上げる瞳に、警戒の色はない。ちりつと胸を灼いた罪悪感と、それを上回る喜悅を隠すために顔をそむけた。

「そぞ。王宮内で日に三度鳴るんだ。始業と終業、それから昼休憩の合図」

自分の言葉で少し興ざめする。そうだ、ここは王のおわす宮殿で、彼が奉職する場である。今日初めて働きにきた娘を相手に、どうこうできる場所ではなかった。

事情のわかるそれなりの女なら話は早いのだが——そんな女では、この情動をおさめきれない。猛り狂う獣のような欲望を受け止

め、赤子をあやすようになだめられるのは、この『外』からきた娘だけ。

ゆっくり。時間をかけて。

無邪気で無警戒な少女と並ぶ彼は、自分もまた成長の途上にあることを自覚していた。完成された大人の男になるまで、まだ数年の時が必要だ。彼女が上司に向けた瞳の輝きを思えば、ことを急ぐのは上策ではない。

なにも知らずに、笑顔で仔鴨のように後をついてくる少女。
彼は暗い悦びが背筋をなでるたびに、腹の底に熱がたまっていくのを感じ、ひとまずは満足することにした。

第二章 3 ヲルーヴェン ヲ（後書き）

青少年としてどうなのか。

第三章 1・5 　　く　グレイヴ　く

早朝の体術稽古を終え、冷たい井戸水で清めた身体を長椅子に横たえて、グレイヴはぼんやりと天井を見つめていた。

かじかんでいた身体の隅々まで血が通い、いまは己が発する熱で暑いくらいだ。ふとわずかに痺れる両手を目の前にかざし、ぐっと指先を握り込む。

——細い肩だった。

まだぬくもりが残っているような気がして、握った掌を開けない。驚かせた。泣かせてしまった。初めてのと看も、二度目も。黒い瞳がこぼれそうなほど目を瞠って、ぽかんとした顔。うつむいて羽毛のような睫毛をふるわせ、ぼたりと涙をこぼす横顔。甲高い悲鳴を上げて腕の中に降ってきた恐怖を浮かべた顔。自分が泣いていることにも気づかず、はにかんで浮かべた笑顔。

実際に言葉を交わした彼女が、どんな娘でも関係なかったのだ。人として絶望的なまでに病んだ瞳に囚われたのだから、多少の欠点などむしろ彼女が生きている証に過ぎない。

蔓のような恋情が、音もなく巻きついて彼を雁字搦めにしていく。未知の感覚が途轍もなく怖ろしくもあり、絡めとられることに渴望を覚えるようでもある。

「……………」

グレイヴは激しい疼きを訴える胸に拳を打ちつけ、苦しさを熱い息にのせて吐き出した。

男ばかりの環境で育ったせい、それともまとわりつく化粧臭い

女たちを鬱陶しく感じて遠ざけていたせいなのか。自分は思うより女という生き物を知らなかったらしい。それともヤヨイが規格外なのか。

なにひとつ、予定したとおりに運ばない。彼女の緊張をほぐすような話題を供し、控えめでも笑顔を引き出し、徐々に会話を弾ませて――。

わかっている。なによりも自分で自分の行動が予測不能なのだ。

ヤヨイを前にすると、歓喜に打ち震える心を抑えきれない。彼女を戸惑わせるようなことを口走りそうで、口を開くのが怖かった。だらしなく笑み崩れる様を見せたくなくて、つい眉間に力を入れすぎ。毅然とした態度を装う余り、横柄に振る舞ってしまう。

睨まれていると感じたのだろう、居心地悪そうに縮こまる姿は無性に腹立たしいのに、どうしようもなく愛しかった。

やわらかな身体。軽くて華奢で、信じられないくらい細い腰をして、胸に抱えた彼女をはなすことができなかった。

でも、必死で離れようとしていた。丸みを帯びた細い指先にも触れるなど、見つめられることすら不快だとその眼は訴えていた。怯えさせてしまった。

同じ失敗はしたくない。けれど、うまく言葉を交わす自分がどうしても想像できない。会いたいのに、会いに行くのが怖ろしい。

視線を巡らせ、窓の外、木立の向こうに覗く西棟を見やる。すぐそこにいるのに。短い休憩時間でさえ顔を見るには十分だ。それでも不安げな瞳を思い出すと、足がすくんで動けなかった。

書記室長が『外』の娘に手を出した――そんな噂を耳にしたのは、つい昨日のこと。

心臓が口から飛び出すかと思うほど衝撃を受け、そのせいで顔の筋肉がぴくりとも動かなかったことだけは幸運だった。いつものとおり王太子の近衛騎士隊を集めて朝礼を行い、各々の配置を指示し、あとは執務室に引っ込んだ。

そのときの気持ちをなんと呼んだらいいのだろう。

とにかくありとあらゆる感情の大津波に翻弄された後、残ったのはやり場のない猛烈な怒りだった。

幼い頃から気心の知れた連中は、明らかな侮蔑を含む苦笑を口元に閃かせ、室長の『外』趣味も大概だ、と眼を見交わした。

聞けば初日の話だという。なぜすぐに教えなかったと罵りたかった。だが騎士団では、『外』に関わる話題は滅多なことでは上がらない。王家の手前『外』の人間を露骨に蔑まない代わりに、いないものと見なしているからだ。

昨夜、上層でガルムを見かけた。だれかに書類でも届けに来たのだろう。もしかしたらジェイルに呼び出されてもしたのかもしれない。遠目だが確かに視線がかち合い、睨んで殺せるならそうしているところだった。

書記室へ回した、と聞いたときから嫌な予感があったのだ。

六年前、ガルムは花形武官から裏方の文官へと、突然の転身を果たして自分を驚愕させた。愛する者を失った悲しみは深いだろう、だが名誉ある騎士の剣を捨て去るほどだとは思っていなかった。

翻意を促すことなどできる状況ではなかった。あの事件の後、ガルムのまとう空気は一切の干渉を受けつけず、名前を呼びかけることも拒んでいた。そう、ちょうどあの時のヒ口と同じ、暗く淀んだ瞳をして。

ガルムが『外』に興味を持っているとは思えない。死んだ女性の

ことは別として、彼はそういうことについて良くも悪くも無関心だったから。けれど、かつて『外』の女性と相愛だった男、という過去がグレイヴの不安を助長する。

——もしもヤヨイに、彼女の面影を見てしまったら。

脳裏に抱き合って睦み合う二人の姿が閃き——グレイヴは強く唇をかんだ。その悪夢のような光景を消すために、両の拳で目をこする。

ガルムはだめだ、ガルムだけはやめてくれと、叫びたいのをこらえて低く咽喉を鳴らした。他のだれかならともかく、ガルムには絶対になわない。

外部からのどんな圧力にも屈しない強さ、鍛え上げた己への自信、揺らがぬ信念、目線の一つにも滲み出る大人の余裕。ただ一度、砂がこぼれるように崩れた姿さえ眩しくて。

騎士として人として、男として、彼に勝てるものなどなにも持っていなかった。そして挑戦する資格を得るだけの時間も与えず、グレイヴの視界から消えてしまった。

消えた人間はもう一人、いる。『外』から来た、子どものように悪戯な眼をしていた男。

同じ絶望に打ちのめされ、生きる道、その意味すらかえてしまった二人。

六年前、あの女性を巡って一体なにがあったのか。

親父殿をも唸らせた稀代の剣士を、常に人の輪の中心にいた朗らかな異邦人を、あれほどに傷つけた出来事とはなんだったのか。

心から知りたくもあるし、決して知りたくないような気もした。

いまだってヒロはよく笑う。気が強くて少しそっかしい妻を迎え、幸せそうに優しい眼をしてその女性を見つめる。けれど決定的になにかがちがっていた。

拳を上げ、ぼやけてしまった視界で部屋の中を見渡す。

机の上の盆には、白い布巾がかけてある。すぐ上の兄に頼んで取り寄せてもらった菓子。ヒロからそれを贈って愛を伝える習慣がある、と昔聞いたことがあったから、ヤヨイが城勤めを始める少し前に用意した。

食べてくれなかったらどうしよう。そう思っでなかなか渡せずにいる。

小さくため息をつき、両手で顔を覆う。彼が勇気を振り絞って歩み寄っても、罪のない笑顔であっさり拒絶する少女。いつそ憎んでしまいたいほど、恋しい娘。

一方的に話しかけられることに慣れていたから、せっかく二人きりになってもどう言葉を繋げばいいかわからなかった。

それでも、会いたかった。

顔を覆っていた手を、じっと見つめる。

初めて正面から自分を見つめてくれたあの日、彼女に差し伸べたのは右手。主を護るために剣を握る手。いつもなら絶対にふさぐことのない手。

帯剣していないことを意識したわけではない。ただ自然と、気づいたら差し出していた。自分の存在意義そのものである手を。

「――」

そうだ、負けるわけにはいかない。ヤヨイをさらっていく男がいるのなら、たとえ相手がガルスであっても闘わなくてはならないのだ。

グレイヴは勢いをつけ、長椅子に身を起こした。書類仕事をする、
といって空けた時間はじきに終わる。

立ち上がった椅子の背にかけていた上着を着込み、大きくゆつくりと深呼吸をして目を閉じる。不意に耳朶をかすめる指先の感触が甦り、甘い痺れが背筋を走った。

机に置いた盆を取り上げて、布巾が落ちないよう慎重に歩き出す。すぐ横にくたりと伸びていた紺色のリボンは、わざと置き忘れた。

第三章 1・5 〽グレイヴ 〽(後書き)

それを渡しても意図が伝わらないこと間違いなし。いま秋だし。

第三章 3・5 　　ゝ ガルム 　　ゝ

愛用の万年筆を置き、ガルムは持ち上げた手で己の首筋をもんだ。指先に少し力を入れただけで、鈍い痛みが目の裏まで広がった。書類仕事は嫌いではないが、徐々に蓄積する疲労に気づいた途端、表に飛び出して身体を動かしたくなる。

やはり向かないのだ。剣を持ち、へばる部下を叱咤して泣かせるほうが性に合う。

ガルムはふつと口元を緩め、頭を振った。

もう六年も前に背を向けた場所だ。いまさら戻れないし、戻るつもりもない。戻られても奴らには迷惑だろう。

本棚に囲まれた書記室を見回し、らしくないひっそりとした息をつく。

サラサラとペンを走らせる音。紙をめくる音。インクの吸い取り紙をはがす音。

あのころは、まさかこんな静かな日々を送ることになるとは想像もしていなかった。

いつだって周囲は騒がしく、情けない悲鳴や下品な笑い声で満ちていた。自分がかかる騎士どもへの号令一つで、その猥雑な空気が切り替わる瞬間が好きだった。風に髪をなぶらせ、雨に濡れ、雪を踏み、汗と土と埃にまみれても誇らしかった。

書記官たちは実に有能で、忠実だ。仕事も早く、終業時には指示した以上の成果を残して退席していく。書類仕事のいいところは、今日はここまで、と区切があることだ。よろしい、今日の分を片づけよう。

ガルムはインクの乾きを確認して、書き終えた書類を箱にしまっ

た。次に取り上げたのは、ランドボルグの東、王弟殿下が治めるスウェンバックの紋章が入った封筒だった。

おや、と思ったのは、数日前にも同じ紋章を目にしたからだ。かねてより順調に進めている城の改築の件だが、アサヌマが立ち寄ったので監督官としてしばし滞在させたい、という旨の文書だった。王からの返信は一言「応」だった。紙の無駄遣いも大概にしろ、とありもしない書記官魂が燃えたものだ。

裏返して封蝋を解める。その横に小さく印がついているのを見つけ、グレイヴ王子への私信であることを確認した。実態は『落下地点』のヒロが王弟を経由させた密書だ。

指先でつまんで振ってみるが、ごく薄くぺらぺらとしている。先ほど仕分けした、ヒロからロアード王子への手紙のほうがよほど重い。——内容も重いものだった。後でロアード王子からガルトムへ向けて、召喚命令が下ることだろう。

本来ならば開封して検閲するのだが、内容などたかが知れている。ヤヨイを嫁にやれなくてすまないとか、どうせそんなところだ。

後で本人に手渡すために、ベストの内ポケットに忍ばせる。まったく、ロアード王子から二人を必要以上に近づけることはまかりならん、とのお達しがあったばかりだというのに。こんなもので余計な刺激を与えたくないのが本音だ。

——まあ、王子が頑張って近づいたところで、あの娘が簡単になびくとも思えんが。

ガルトムは幾度目かの思い出し笑いをして、次の書類を机に広げた。

自分の顔と身体が、女にとって魅力的なことは知っている。

武官であったときも文官になったいまも、城内を歩けば少なからず艶のある視線を投げかけられる。慎みも恥じらいもない、距離も衣服も無にするような女たちの欲情にけぶる眼差し。

それとは別に、男たちが実に無遠慮な目で自分を観察していることも知っていた。

かつては近衛を束ねる騎士、現在は城の機密を握る書記室の長。一軍を率いるよりも、政の中枢にあるよりも、多くの力を握っている己。一挙手一投足が注目を集めるのも無理からぬこと。

だがあれほどまっすぐに、かつ純粋な憧憬を向けられたのは初めてだ。潤んだ大きな目に、性的な含みは一片もなかった。上官への尊敬を抱くにはまだ早い。あの娘が自分の中に見ていたのは、おそらくは亡くしたという父親へ求めていたもの。

あの国王陛下にさえあっさり懷いたと聞く。オージェルムの戦神、人前では剣を振るうか酒を飲むか、怒るか笑うかしかないあの強烈な親父に。

無理もない、まだ成人前で世間知らずなのだ。まして両親は彼女を置いて逝ったという。身近な男に父親の影を求めるのもあり得ること。

それが故なのかどうか、ひどく幼い、と思った。女らしい丸みを欠いた細い身体も、男の目を臆さずに見つめる危機感のなさも。

すぐ傍らに、その白い首筋にかぶりつこうとする雄がいることにすら気づかない。

あまりの鈍さに、必死で気を引こうとしていたルーヴェンには悪いが、笑いが込み上げると同時に同情すら覚えた。代わりに、ヤヨイには手を出すな、という言いつけに背いたことは許してやろう。もとより従うとは思っていなかったが。

あの娘はまだ、色のおいを嗅ぎ取る機能が未発達なのだ。そんな少女に庇護欲を覚えることはあっても、愛欲を抱くことなどありえない。ガラムは今年三十五歳になる。ロアード王子ではないが、十代などまるで子どもとしか思えない。

だというのに、あの王子ときたら噂を鵜呑みにして、廊下の向こうからガルムを殺しそうな目で見ていた。ロード王子がそばにいないければ、抜剣して殺しに来ただろう。そういう視線を向けられるのは悪くない。

その殺気に敬意を表して、書庫でのみ逢引を許可した。存分に無駄な努力をすればいい。

ヤヨイは迷惑そうだったが、あの王子はガルムが育てたようなものだ、勘弁してもらおう。

——まったく、宿舍の天井の染みに怯えて、一人では眠れないと泣きべそをかいていたガキが。

思わず噴き出すと、近くの席に陣取った部下が振り返った。笑みを隠すこともなく、首を振る。部下は視線を自分の手元に戻したが、遠くからは若葉色の瞳がこちらを睨んでいた。ここ数日で慣れた視線だ、あれも若くてよろしい。

グレイヴといい、ルーヴェンといい、『外』趣味というのは厄介なものだと思う。ろくに知りもしない女にあれだけ入れ込めるのだから、いつそ羨ましい。そして若い連中が恋に翻弄され、右往左往する姿を見物するのはおもしろい。

それも仕事に差しさわりがない程度なら。——ルーヴェン、さつさとその書類を上げにこい。

ガルムは好戦的な視線を鼻先で受け流し、書類の表面を眺めて意識を飛ばした。

ヤヨイではない、『外』の女を知っている。遠慮がちな物言いも、ガルムの常識を覆す発想も、やわらかな頬の触れ心地も。

自分がミツエに惹かれたのは、彼女が『外』の人間だからではな

い。長く近衛にいたせいか、初めは興味を持つてもしなかった。『外』の人間はただ、この国の仕組みをかせ、新しい風を送り込む^{ふいこ}のような存在だという認識しかなかった。やり過ぎて屋台骨から燃やされなければ、それでいいと。

彼女もあの娘と同じ、黒い瞳をしていた。いや、彼女のほうが少し茶がかったいたかな。

六年前、この腕から失った暖かな笑顔。かつて愛した女の顔を思い出し、ひっそりと微笑んだ。だがそれも、彼女の面影とともに思ひ出す男の顔で引つ込む。

あいつも同じ黒い瞳だ。そこに灯る明るい光を絶やさず、さりげない懸命さでミツエを支えようとしていた男。

ヒロは、多分ミツエに恋をしていたわけではない。同い年、同じ場所から来た女が、ひどく傷ついていることに心を痛めていただけだ。実際ミツエの腕はひどい有様だったし、故郷での出来事以上にそのことで彼女が絶望していたのも確かだった。

彼らの多くは、ここでの暮らしを受け入れられずに再び死の道を選ぶ。元々そのつもりだったわけだし、なんのしがらみもない場所へ来たといっても、心に負ったものから逃れられるはずもない。『神殺し』の異名を持つ、あの老獪なアサヌマでさえ深い懊悩に苦しんだと聞いた。

それでも、時が経つにつれ、ミツエはヒロと同じように朗らかに笑うようになった。

自分で仕事を作り、忙しく働くことに悦びを見出していた。ガラムに出会い、見交わす視線に含むものを感じ合い、剣を握る無骨な手が白い肌に触れることを許してくれて。腕を組むのが好きなのだと、残された左手を絡みつけるようにしてよくそれをねだった。

あの日も、それなのに――。

治りきらない古傷が疼く痛みに、ガルムは低くうめいた。歯を食いしばっても一度知覚したそれはなかなか過ぎ去ってはくれず、背中を這い上がる憎悪に似た苦痛に鳥肌が立った。きつく眉を寄せ、逃げるのではなく流されようと努める。

ミツエが恋しかった。

夢のような甘い悦びを分かち合った女。特別なことなどにひとつなく、自分もただの男なのだと教えてくれた女。彼女のためなら命も捨てられると思うのに、やはり彼女のために生きたいとも思っ

た。

同じくらい、ヒロにも会いたかった。

会って、ミツエのことを話したかった。彼は自分以上に彼女のことを理解していて、もしかしたら最期の瞬間を知っているかもしれないのだ。自分を憎んでいることはわかってはいるが、もしも知っているのなら、彼女が最後に見たものを教えてほしい。遺した言葉を聞かせてほしい。そのためなら床に顔をこすりつけてもかまわない。

だが、その望みは決して叶うことはない。

ガルムは仕分けの済んだ書類の山からはみ出した、研究所の封筒を一瞥する。

ロアード王子に宛てられた手紙には、角ばった几帳面な字で、ヤヨイを書記室から異動させてほしいと認められていた。ヒロが王家の決定に嘴を挟むなど前例のないことだ、それだけガルムの手元に置いておきたくないのだらう。無論、それをガルムが読むと承知の上での訴状である。

互いの間にある確執については言及していなかったが、それでも王子からは説明を求められるにちがいない。ヒロが六年前の件に関して沈黙を守る以上、ガルムから話すわけにはいかなかった。

ガルムは無意識に詰めていた息をはつと吐き出し、皺の寄った眉間に触れた。

年下で格下の少年に罵倒されようとも、無性に煙草が吸いたくなつた。

第三章 3・5 〽 ガルム 〽 (後書き)

ミツエさんの正体が見え始めました。

アサヌマさんが段々とんでもない人になっていく……。容姿のイメージはマスター・ヨード。

第三章 5・5 ｼﾞｴｲﾙ ｼ

兄が執務室へ押しかけてきたのは、今日はもう店じまいにしようかな、とジェイルが欠伸を噛み殺す頃だった。朝が早い彼にとって、この時間の来客は憎悪の対象だ。

いつものようにコン、と一つノックをして、返事を待たずにドアを開ける。深夜とはいえ、そこまでならまあることだ。だが今日の兄には連れがいた。

「あれ、ガルム」

兄の後に従って部屋へ入ってきた大柄な人物は、愛すべき書記室長その人だった。何度見ても、何年経っても、白いシャツに羽織った臙脂色のベストが似合わない。

「珍しい二人組だね」

六年前までならいざ知らず、というつぶやきは、胸の中でぼつりと消えた。

ジェイルに騎士はついていない。いつも身軽にふらふらと城内を出歩く彼に、だれもが親近感を持つと同時に変わり者だとあきれている。

近衛の警護を断った理由は二つ。いまだ王族であるとはいえ、臣下の分をわきまえていると示すため。それから、以前の兄とガルムのような関係を、自分がだれかと築けるとは思えなかったからだ。グレイヴが傳かれる国王軍でなく、傳くほうの騎士団を選んだのも同じ理由だろう。確かめたことはないけれど、悩みまくるくせに単純なああの弟のことだから正解にちがいない。

ジェイルは窓辺の絨毯を手で示し、自らも椅子から立ち上がってそこに腰を下ろした。

「なにさ、ヤヨイに関する苦情？ 五日目でもう問題発生？」

お気に入りクツションを立てた膝に載せ、そこに顎をうずめる。お気に入りの香水と自分のにおいがして、強張っていた肩が弛緩していくのを感じた。

ロアードはなにも言わずに懷を探り、一通の封書を差し出してくる。右の隅に描かれたのはたなびく旗に塗りつぶした丸の印——落下事象研究所の紋章。

こつちが先か、と、ジェイルは思い切り舌打ちしたいのをこらえた。

「読んでいいの？」

大きく眉を跳ね上げると、兄は無言のままうなずいた。

無造作に封筒を開き、欠けてこぼれる封蝋の屑をガラムに投げつける。軽くよけられたのを見て舌を出しておいてから、重ねられた三枚の紙を広げた。見慣れた四角いヒロの文字は、彼が見た目どおりのお気楽な人間でないことを如実に語っていた。

一枚目は王とロアードへの挨拶。謁見の際ヤヨイに示した温かな対応に向ける感謝。二枚目はヤヨイに関する詳細な報告と——どうやらアサヌマのような能力は期待できそうにない——、彼女に支給すべき妥当な金額の請求。今回も『落下』の事前予測は不可能であったこと、おそらくは今後也不可能であろうということが、率直な言葉で記されている。

そして三枚目に目を移し、ジェイルは大袈裟に声を上げた。

「あら——珍しいね、ヒロがこんなこと言ってくるの」

紙の陰から二人の様子をうかがう。ロアードは首肯しつつも怪訝

な顔、ガルムは目をそらしているが苦い笑みを浮かべていた。

殿下の采配には深慮がおりのことと心得ているがヤヨイの配属を再度検討していただきたく伏してお願ひ——なんたらかんたら。要するに、ガルムの毒牙から遠く離れた場所に異動しやがれと、ヒロはそう要求してきたわけだ。

思ったより遅かった。このおっさんがあの娘に手を出した、という噂は初日に自分の耳にも届いたのに。もっともランドボルグの学者には緘口令を敷いたから、ヒロはもしかしたらそれを知らないかもしれない。

いずれにせよ、よほど腹に据えかねているのだ、このおっさんを。

ジェイルは内心でヒロを罵倒した。

それどころじゃないだろう、ヤヨイにはなんの取り柄もないというのなら、もっと心配することが他にあるだろう——だが視界を曇らせるほど何年もだれかを嫌い続けることができるなんて、情が深くて結構なことだ。

皮肉に締めくくり、ジェイルは紙の陰でぐつと眉をひそめてから、何食わぬ顔でそれを兄の手に押しつけた。

「大枠を決めるときに口出してくることはよくあるけど、なにこれ？ 書庫掃除じゃまずかった？ ヤヨイは本を見ると病気になるのか？」

「さあな。理由があるとしても、俺にはわからん」

言ってロアードはちらりと横の大男を見やった。その目には気遣わしげな色がある。

ヒロとガルムの名前が出たら、共通項はただ一つ。だからこそこの手紙だろうし、兄がわざわざガルムを伴ってジェイルを訪れる

所以でもあるのだ。

黙りこむおっさん二人に、ジェイルはため息をついた。

「ミツエ——だね」

ぴし、と空気が音を立てたかと思った。

「もー……おじさん、いい加減ヒロと仲直りしてよ。僕、板ばさみにされまくって薄っぺらになっちゃいそうなんだけど」

ガルムはなにも答えず、ただ苦い笑みを深くした。

彼にしてみればなんとも無神経な発言だろう。だが事情を知らない王子が口にするなら、これくらいは冗談の範囲内。ヒロが尻尾の毛を逆立てるとわかっていて、あえて書記室へ送り込んだことも、文官の長であり王族である彼が様子見をしている程度に受け取られているはずだ。多少踏み込んでおいたほうが、色々と勘繰られないで済む。

ジェイルはふん、と鼻を鳴らし、ロードがガルムの肩を叩くのを横目で見た。本当に、なにも事情を知らなかったら楽なのに、と思いつながら。

七年前に落ちてきて、六年前に死んだ『外』の女性。ランドボルグで女性用の衣料品を商い、絶大な人気を博した人。享年二十六、ガルムとは恋仲になって間もなかった。

ミツエの死は多くの人生に暗い影を落とし続ける。

ガルムはあれ以来、必要以上に兄に近づかなくなってしまった。

まるで彼の中にあつた宝箱が、ミツエに奪われてしまったみたいだ。自分はもうだれも大切にすることができないとも言つように、兄の友人であることすらやめてしまった。

兄はそれを受け入れたように見えるけれど、本心ではまだ友に対する想いを断ち切れていない。

ミツエがどれだけ素晴らしい女で、彼女を失つたガルムがどれだけ嘆いているかなど聞きたくもないが、途中で逃げ出すくらいなら最初からこの人に踏み込まないでほしかったとジェイルは思う。

玉座まであと一步。あの殺しても死にそうにない親父殿は、まだまだ兄に王位を譲るつもりがなさそうだ。王になればまた話は別でも、あまりに長い孤独は魂を蝕む。怖ろしいほど自分のことに鈍感なこの兄は、友に去られた己の心が血を流し、寂しい寂しいと叫んでいることにも気づかない。

たとえガルムやヒロが嘆くあまりに発狂したつてどうでもいいが、この兄がまつすぐ歩けなくなるようなことがあつてはいけないのだ。

うんざりした。

だれもかれもが死んだ女に振り回されて、そのだれもかれもに振り回される自分は目を回してフラフラだ。なのになんにも知らない振りをして、必死でにつこり笑つて見せる自分は——なんて健気でいい奴だ。

可愛いじゃないか。僕は僕が大好きだ。

なかば自棄気味にうなずいて、ジェイルは口元の力を抜いて笑みを作つた。さぞかしふんわりした笑顔に見えることだろう。

「今度の同胞があんまり若いから、ヒロも心配してるってことじゃない？ 十七歳っていったら、あちらではまだ子どもなんですよ？」
だがここではもういい大人だ、さっさと遠くの町に嫁にでも行つ

て彼らの前から消えてほしい。『外』の女なぞろくなもんじゃない。グレイヴの恋心に僥倖を見出したらしいヒロが、心底から恨めしかった。

ん？——ああ、そういう使い道もあるのか。

ジェイルはふと、腹の底が真っ黒な父王が今後打つであろう手の一つが読めた。そしてヤヨイを書記室に送り込んだ自分の手が、失着であったことに気づく。

ヒロが心から安堵するような場所に追いやればよかった。そうすれば彼は冷静に、父王が彼女をどういう駒に位置づけるか思い至ることができたのだ。

しかしまあ、過ぎたことは仕方がない。ジェイルは気持ちを切り替えた。

ヤヨイの噂がランドボルグを駆け巡ってから既に四ヶ月。近いうち、彼女の人生は大きく舵を切ることになるだろう。帆に受けるのは追い風か、それとも向かい風か。

ジェイルは兄とガルムの顔を盗み見て、眉を寄せた。

父王、ヒロ、アサヌマ、兄とガルム、そしてミツエ。どう考えても一番簡単な解決法はもう提示されている。父王がアサヌマを手放すことはありえず、アサヌマはヒロの意向に決して背かず、そしてヒロがミツエを過去の人にできないのなら。。

めんどくさい。ヒロなんか死ねばいいのに。

不穏なことを考えて、ジェイルは少し楽しくなった。そして彼が本当に死んだ後に起きる混乱を考えて、楽しくなくなった。やめた、むなしい。

「彼にしては強引なやり方だが」

静かに語りだす兄の声に我に返って、ジェイルは兄に視線を向けた。

「無視できる相手でもない。ヒロはいまや、『外』に関するすべてをまとめる実力者だ。ヤヨイが色々と慣れるまで、おまえのところで面倒を見てやるのがいいだろう」

——はい、願ったり。

「は、僕のところ？」

胸の内を悟られないために、表情を大きくすることを覚えたのはまだほんの幼い頃。思いのほか感情が表れる目元は特に。間抜けみたいなびつくり眼は、驚きと悪戯にしか読み取れまい。

「いやあ……まあ、親父殿は喜ぶと思うけどな。ヤヨイには迷惑な話だろうね」

王の執務室はここからほど近い場所にある。階段を上って廊下を抜けた先だ。あの父王がジェイルの部屋を訪ねたことなど皆無だが、ヤヨイがここに詰めるとなったら話は別だ。新しい玩具をもらった子どものごとく、ことあるごとに押しかけてくるにちがいない。

ヤヨイの前では気のいいおっさんを演じると決めたらしい父王の顔を思い出して、ジェイルは本気で青ざめた。毎日見るような代物ではないだろう、あれは。暑苦しいうえに不気味だ。

「それより、グレイヴが泣いちゃうんじゃない？」

「別の領地にやるわけじゃなし、やむを得まいよ」

「そうかなあ、もう少し別の手を考えたほうがいいんじゃないかなー？」

ジェイルは頬の引きつりを制御できず、仕方なしに手をあてて隠

した。しかしガラムが薄笑いを浮かべているのを見て、意識せずとも引きつりはとまった。

「わかったよ！ 朝一番でなんとかするから、多少の不都合は目をつぶってよね！」

兄たちは目を見交わし、それぞれの表情でうなずいた。

空気が穏やかにかわったところで、すかさずジェイルはもう一人の役者のことを話題に乗せた。

「ところでさ、スウェンバックの叔父上は元気？」

素早くガラムの表情を観察する。動かない。ロアードは少し笑ってうなずいているが、とりあえず兄はどうでもいい。

——知らないのだ。やはりまだ。わかっていたけど。

数日前にはアサヌマが城の工事を監督することになったと聞いたし、ヒロのほうでも叔父に対してなんら含むところはないと見える。

不幸な人たち。馬鹿じゃないの。

心の中で罵倒しながら、ちょっとだけ悲しくなった。だが残念なことに、ジェイルにはだれのこととも恨む権利がなかった。

当時の彼は十六歳の若造で、大人たちの泥沼の恋愛劇を遠くから胸高鳴らせて覗き見ることでしかできなかったのだから。

覗き癖も大概にしないと、痛い目を見ることだけは学んだけれど。

「さて、僕も今日はもうお終い。ガラムは？ 帰るならお見送りくらいしますけど？」

結局この部屋で一言もしゃべることなく、ガラムは席を立った。彼を伴った兄の真意をジェイルは察していたけれど、それに触れることはなかった。

通用口でなく本館の玄関まで赴き、少し離れたところに兄の近衛をとどめた。なんとなく無言のまま顔を見合わせていると、ガラガラと騒がしい音を立てる一団がこちらへやって来るのに気づいた。

ガラスで覆いをつけたランタンをかざしているのは、グレイヴの侍女だ。台車を押しているのは——王族用の食堂付の、給仕の少年？三人の前で立ち止まった二人は、丁寧なお辞儀をしてからその場を去ろうとする。ジェイルは疑問符でいっぱいになりながら見送るうとして、あわてて声をかけた。

「ちょ、ちよつと待った！ 君たちいまどこから来た？」

振り返ったのは侍女。兄と同年代の女性は感じのいい笑みを浮かべ、西棟はずれの書庫だと答えた。

「他の使用人は先に下がらせました。殿下も『外』のお嬢さんもお部屋を出られましたので、後片づけをしております」

少年が頭を下げ続ける横にあるのは、料理を運ぶための台車だ。ということとは、グレイヴは書庫で夕食をとったのか。この台車を二階に上げさせて。

ジェイルは啞然とした。

……書庫で？ ヤヨイと一緒に過ごすために？

ぶふつ、と噴き出す音に振り返れば、ガルムが拳を口にあてて横を向いている。

ジェイルも笑いたかった。だがあのグレイヴが、融通が利かなくて頑固な弟が、埃くさい書庫で生真面目にナイフを握っている姿を想像すると——笑うより泣けてきた。

いくら騎士団の手前があるとはいえ、あの弟にそこまでさせたヤ
ヨイという娘が哀れであり空恐ろしくもある。しかもその娘は、近
々自分の執務室に詰めるのだ。

「……ああ……そう……。それで、書庫のお嬢さんは？　もしかし
てグレイヴが部屋に連れ込んだじゃった？」

額をおさえながら尋ねると、侍女は首をかしげた。

「いいえ。なにかものすごい勢いでお部屋を飛び出してこられて、
そのまま帰ってしまったようです」

ロアードは端正な面差しからますます表情を消し、ガラムは太い
眉をふるわせて笑いをこらえ、ジェイルは今度こそ大声で笑った。
暗く広い空間に、ジェイルの大爆笑が響き渡る。

どうやら長い夜を過ごすのは、自分だけではないらしい。

ジェイルは秘蔵の酒でも携えて、いまごろふてくされている弟を
訪ねようと決めた。そしてヤヨイがジェイルの下へ来ることを伝え、
ちよつと焦らしてから、グレイヴに回す書類を増やしてやると伝え
よう。

読み書きが不自由なお馬鹿さんでも、お使いくらいはできるはず
だ。できなくても尻を叩いて教育してやるに吝かでない。

あの子の幸せを願うのはなにも長兄だけの特権ではないし、いつ
も物欲しげな顔で兄や自分を見ていたあの子が恋した娘に、興味が
ないわけでもない。

たとえ自分の手元にいるのが、ごく短い時間だとわかっていても。

第三章

5・5

）

ジェイル

）

（後書き）

第四章 1・5 ｝ ロアード ｝

王の間は、息が詰まるほどの緊張感に包まれていた。

ゆつくりと閉まる扉の向こうに末弟の姿が消えるのを待ち、ロアードは室内を振り返った。居並ぶ面々を端から見渡し、今日の案件に見当をつける。

「お待たせを」

何食わぬ顔で――食っていたとしても無表情だが――だれともなく詫びの言葉をかけ、王の前へ進み出る。そばに控えていた初老の文官が数歩下がって、ロアードの場所をあけた。

この部屋に客のための椅子はない。

あるのは奥の壁を背に据えられた、洒落た細工の一つもない質素な玉座。それに書記官が陣取る書き物机と併せたものだけだ。

ロアードはわずかに顔を動かし、椅子の肘掛けに腰を下ろし腕組みをして、寧猛な笑みを浮かべる父王と視線を合わせた。詰襟の首元が苦しくなるほどの威圧感は、強い光を放つ深緑の瞳から噴き出している。その圧力をそよとも感じない様子で、王の近衛が二人、ロアードの背後に立っている。

父王のたくましい顎がくいと上がり、一人の人物を示す。逆らわず目を向けると、灰色の神官服を着た中年の男が深々と頭を下げていた。この場の空気を凍らせる張本人。

「……ドムファナ神殿」

の神官だな、とまでは続けず、服の型と袖の縁取りで確かめる。

ロアードは急な召喚命令が直接王からもたらされ、ジェイルを経てこなかったことの意味を知った。ドムファナの僕は、前もって来

意を告げてはこない。王がドムファナを蔑ろにすることなど、思いもしないからだ。思っただけでもそれを認めないから、というべきか。つるりとした広い額の神官は、深々と腰を折って慇懃な口上を述べた。

「王太子殿下におかれましては、ご息女がご誕生なされたとのこと、お慶び申し上げます。殿下もご承知のことと存じますが、昨今我が国における我が神の凋落甚だしく、復活を願う我ら僕は、是非に請うて有難い御位を戴くことと相成りました」

ロアードは回りくどい口上の、最後の部分だけ聞きとめた。御位とやらを授けて寄越すドムファナの大神殿は、ランドボルグにない。

ロアードは静かに目を伏せた。

かつて点在する主要な領地を除き、オージェルム全土で権勢を誇った――いや、猛威を振るったドムファナ神殿。

数百年にわたって民を心理的な支配下に置き、領主の権限を侵し、曖昧なお告げで法を歪め、人命と金品を秤にかけ続けた神。

影響の薄いランドボルグから王家がどれほど働きかけても、蠕動するドムファナの根を駆逐することはできなかった。

「本日は、その目出度き儀に供するに相応しきものをお譲りいただきぬかと――」

中途半端に背をかがめたまま言いさした神官の言葉は、しかし王によって遮られる。

「――して」

王がことさらに低めた声に、ロアードはうなじの毛がちり、とふるえたのを感じた。

「大いなるドムファナの遣いよ、その位をなにで購う」

椅子の肘掛けに腰を下ろしていた父王は、しなやかな動作で立ち上がり、神官へと歩み寄る。

「ランドボルグでの神殿建立の約か。それとも金か」

王は笑顔だ。だが深緑の瞳には剣呑な光が瞬き、左手は腰の得物に触れている。

「あ、購うなどと！ 我が神の僕は清廉を以って旨とする戒律を遵守しておりますぞ！ 我が神を冒瀆なされればいかな陛下といえど――」

「ではなんだ。よもや『外』の娘ではあるまいな。『神殺し』の眷属だぞ」

神官は衣裳と同じくらい灰色になった顔に、屈辱と恐怖を浮かべた。

「わ、我が神は死んでなとっ！」

凶星か。

あまりに安い役者振りに、ロードは元々なかった興味と感心が綺麗に消えてなくなるのを感じた。

「相変わらず、次から次へとアサヌマに凶手を送り込んでいるようだな。ことごとく返り討ちにされ、大神官も業を煮やしたか。娘を手に入れアサヌマと引き換えるようヒ口を脅迫する腹づもりのようだが、夢を見るなら神殿の中でだけにしておけ」

酷薄な笑みを口元に刷き、王は剣帯の留め金を音高くはずした。

「陛下、お待ちください！ 我らはただ和睦の徴として――」

神官は広い額にびっしりと汗を浮かべ、なにか必死に訴えかけている。ロードはそれをなんとなく見物しながら、『落下地点』の連中に特別手当を出さなければならんな、などと考える。

アサヌマにつけた護衛が使命を果たしていることは、叔父が寄越した暢気な書簡からもうかがえる。同様に『落下地点』から報告が

ないという事実が、あの集落での首尾を物語っていた。

ヒロは集落の何人かが、王から送り込まれた護衛であることを知っている。だが実際は何人か、ではない。あの集落丸ごと全部が、王の兵隊そのものなのだ。

ヤヨイもヒロも日常を脅かされることなく息災にしていた。当人たちに気づかれることなく、完璧な仕事をしている。上出来だ。

「ですが前年も同額をご寄進下さったではありませんか！ そのお志こそが、陛下の御心がドムファナにある証と、証と我らはッ！」
「確かに、あの金は俺の気持ちよ。おまえらは金が好きだろう？
家畜と同じだ、餌を与えておけばおとなしい」

まだやっているのか。

ロアードは少々飽きてきた。父王はあきらかにもつたいぶつて楽しんでる。久方ぶりの遊戯にはしゃいでいるのだろ。どうせ結末は決まっている、親父殿お気に入りのアサヌマを煩わす輩が、すぐ目の前にいるのだ。

二十数年前、闇の凝った神殿に弾効の光を浴びせ、影を打ち払ったのはアサヌマだ。ドムファナにも、どの神にも属さぬ魂の正義によって正道を示し、汚泥にまみれた神殿と聖職者を糾弾した。そして恐怖と不条理で民の心を支配していたオージェルムの神は、その罪を詳らかにされ、信心を失って死んだ。アサヌマはいまも国中を巡って民のために光を掲げ続けている。

常に神殿の放つ暗殺者の刃に晒されながら、決して自らの信念を曲げない異邦人。その命と持てる知識のすべてを以って、オージェルムに同胞を護る翼であることを誓わせる老人。

ゆったりとした歩調で進む王に気圧されたか、神官はじりじりと後ずさる。だが控えていた老臣に背を突かれ、つんのめるようにし

て王の前にまろび出た。その赤く濁った目は見開かれ、王が浮かべた獰猛な笑みを映した。

「お、おお、お待ち下さいッ！！ 神は決してこのような、聖なる僕への振舞い——話が、話がちがうッ！！」

「おまえの神に伝える。オージェルム王はおまえの復活など望まない、とな」

ロアードは父王が腰の得物を引き抜き、右手一本で振りかぶるのを無感動に眺めた。

オージェルム王が『外』の人間を厚く庇護することには、理由がある。端的に言えば彼らの持つ知識を余すことなく引き出し、それが他に流出することを防ぐためだ。

そしてなにより、オージェルム人でなく、この世界の生まれではないという彼らの特質。民らがどこまでそれを理解し、信じているかはともかく、常識と感性を共有しない存在であることが重要なのである。

『外』は素晴らしい、『外』は夢のような場所だ——。王自らが吹聴することで、祖国をそんな場所にするため多少の痛みは我慢して、そこから来た彼らの勧めに従うのだ、と言い聞かせる。一時的に怒りや不満は彼らに向くが、結果生活が向上すればそれも収まる。そうして王たちは悪しき因習を打破し、目障りな敵を一掃してきた。彼らは王と民の間に波風を立てぬための盾。そしていまなお発展と拡大を窺うオージェルムの頭脳なのだ。

喉元に刃物を突きつけ、首に縄をかけて脅しても得られるものに

は限度がある。彼らが心から、喜んで自分の持てるものすべてを差し出すように、記憶の底を浚うようにして提供してくれなければ意味がない。

王は何者にも膝を折らぬが、国策としての懐柔に必要なならば、友好の笑顔を作ることには厭わない。特に彼らはことあるごとに頭を下げるから、それはきつと屈辱的な行為ではないのだろう。心情的には腸の煮える思いでも、父王はアサヌマに頭を下げる。

血糊で汚れた剣を放り、王は部屋の隅に控えた小姓に顎でそれを示した。顔色一つかえず、小姓は剣を拾って捧げ持ち、近衛が開けた扉から出て行く。眉をしかめたグレイヴの横顔がわずかに見えた。「鬱陶しい連中だ。本気でかつての権勢を取り戻せると思っているのか」

唾でも吐きかけそんな表情で、父王は首のない遺骸を一瞥した。軽く眉を上げたのは、狙いよりも上を斬り飛ばしてしまったことへの自省だろうか。神官の頭は、顎先から咽喉仏のあたりが砕き潰されていた。

飛び散る血で壁や床はおろか天井まで汚れ、毛足の長い絨毯をこよなく愛するジェイルが見たら、鼻に皺を寄せて嫌そうな顔をするだろう。それを想像して、ロードは愉快になった。

しかし見物客はだれも血を浴びた様子はなく、父王の見事な斬首に感嘆する。刃を振り抜く角度で、血液が噴出する方向を調節できる。ただ相当な膂力と思い切りのよさを要求されるので、ロードは自分に同じことができるとは到底思えない。

「アサヌマがうまく立ち回っている証でしょう。『外』の者が民衆を味方につけ、王の陰に隠れて勝手をしている、と」

神官を突き飛ばした老臣が厳かに言つて顎鬚をしごく。父王は鼻を鳴らし、腰に手をあてて窓の向こうを見やった。

「あれは聡い、使い勝手のいい男だ。難事が起きた際、解決法を尋ねても知らぬと言われればそれまで。奴らの頭をかち割つて知りおることを取り出せるならよいが、そうもいかぬ。だが相応の代価を支払い、猫なで声で甘えてみせれば、実力以上の力を発揮する」

そして父王はロードに肩越しの視線を寄越し、王者たる者かくあるべし、という覇気と自信、それからごく微量の孤独を瞳に閃かせた。

「覚えておけ、ロード。知識や助言は、忠誠や愛と同じだ。無理やり引き出し、得られるものではない。頭でわかつたつもりになっていると、ヒコを使いこなすことはできんぞ」

「はい」

従順な返事は、意識せずとも咽喉の奥からひとりで湧いて出た。この父の前に出ると、まるで牙と爪を封じられた仔猫にでもなった気がする。こんなに愛想のない愛玩動物など、王の子以外に仕事の口はなさそうだが。

王は太い指先で顎をつまみ、引いては放すという動作を繰り返しながら、ふと疲れたような息をついた。

「本音を言えば、『外』の人間など現れるたびに殺せば話は早い。だが得がたき知識も失われる。現に手厚く遇し、懐に迎え入れた者共はよく働く。……失敗し、指の間からこぼれ落ちた者もいる」

前者はアサヌマヤヒコ、後者は——ミツエ、か。ロードは胃の腑がずんと重苦しくなるのを感じた。

室内に満ちる血臭が、徐々に密度を増していく。大量の血が放つ鉄錆に似たにおいが強まり、放置すればやがて不快な腐敗臭に取って代わる。だが流されたばかりの新鮮な血のにおいが、ロードは

嫌いではない。

肺腑の奥まで存分に臭気を取り込み、ともに自身が腐れていくような幻想を味わった。

倒錯的な思考に耽るロアードに、父王は既に興味を失っている。あらゆる情を捨てたような横顔で、ここではないどこかを見ていた。

「あの娘、アサヌマやミツエのような働きは期待できぬ、と『落下地点』より報告が参っておりますが」

だれも、十人近くいる人間の誰一人として物音を立てぬ中、しれっと申し上げた顎鬚の老臣。予定調和の問答だ、とロアードは思った。ただこの場を終着点に運ぶ、荷車のごとき役割を果たすだけの言葉。空気だけですべてを理解しなければならぬときもある、だがそれはいまではなかった。

老臣の声に促され、王は大きく頷いた。白髪混じりの金髪が揺れ、高い頬骨に落ちかかる。

「確かに有益な知識のない『外』の者には、そのような使い方もある。だがたとえそのとおりであっても、死んだ神にくれてやるほど俺は寛容ではない。それで俺の腹が膨れるわけでも、金蔵にうなるほどの金が入るわけでもない。ヤヨイには、別の使い道がある」

父王は書記官の机から、『落下地点』の研究所の紋章が入った封筒を取り上げた。

「俺はこれ以上、ヒロの不興を買いたくない。あれは抜け目ない男だ。笑顔の裏で冷徹な計算をして、最大限の成果を得るべく動く。

自分の見せ方とその効果を知っている。——俺の側近に加えたいな」

さやさやと、老人たちの乾いた笑い声が室内を漂う。ロアードは唇の端で同調し、心中を隠した。彼を側近にするとしたら、自分だ。父王には既にアサヌマという強力な尖兵がいる。しかも因習や悪癖の堤を切り崩し、いまま清涼な水を導き続けている。

いかにオージェルムの戦神であっても、それ以上の手駒を取るの
は、そう、ずるい。

「では、陛下？」

老臣が鈍く光る目を向ける。

そこでようやく、先ほどから口を開いているのが彼だけだとロアー
ドは気づいた。最初から茶番だったわけか、神官の処刑でさえも演
出に過ぎなかった。してみると、あれは存外いい役者だったのかも
しれない。

「能のない娘が権力者に嫁ぐ話は民草に受けがいい。ヒロにも異論
はないだろう。目を離すな、とは言わずともそのつもりだろうよ。
グレイヴにくれてやれ」

まるで荷物でも遣り取りするように、父王はこともなげに言つて
呵呵と笑った。ロアードはひそかに息をつく。すぐ下の弟ならば、
こんなとき皮肉の一つも言うのだろうに、と。

「話が終わったらグレイヴを入れる。あれが間抜け面で大喜びする
のを眺めて一杯やるのも悪くないぞ」

扉脇の近衛に王が人の悪い笑みを向け、彼らは目線だけで同意を
示した。

王の近衛が総じて『外』に他意を抱かないのは、こうして密議を
耳にする機会があるからだろう。近衛騎士など全体でも五十人とい
ないのだから、事情を明らかにすればよいのに、と思うことも少な
くなかった。だが王の真意を『外』の連中に気取られるのは、決し
て良策とはいえない。どこから話が漏れ、歪められ、彼らの耳に届
いてしまつかわからないのだ。

ロアードは黒い瞳の友人を思い浮かべた。

「……四ヶ月」

知らず、声に出してつぶやいていた。

若い女性が落ちてきた、その一報は即日ランドボルグにもたらされ、様々な思惑を持つ者の間に広まった。ロアードはそのとき、正確に來たるこの日を予測していた。おそらくはジェイルも。

ヤヨイと同じく、国の助けにならない者はこれまでも多くいた。

そのほとんどが再び死の道を選び、残った数人は理解のある地方領主の下で静かに暮らしている。

だがヒロやアサマのように、華々しい活躍を見せる者も確かに存在するのだ。その知識と発想はこの国の仕組みを根底から覆し、新たな境地へと導いた。気候や災害などの不可抗力を別に——時にそれさえも適切な防備でもって迎え撃つ——平素の民の暮らしが安定すれば政もまた平らかになる。特にアサマの苛烈な手腕と姿勢は、父王の目指すものにぴたりと合致した。アサマは命を狙われ、消えぬ傷痕で老体を覆っても歩みを止めることがないし、だからこそ父王も『外』の人間を大袈裟なまでに擁護するのだ。

だが——。

ロアードは、ドムファナ神の僕だった骸に一瞥をくれる。

四ヶ月。ヤヨイが現実を受け入れ、踏み出すまでには短い時間だっただろう。けれどオージェルムを中心とする周辺の国々にとってそれは、あらゆる陰謀を企てるだけに十分な期間だった。

アサマがこの地を改革し、ヒロが同胞の援護に尽力するほど、ヤヨイの利用価値も高まっていく。ロアードが考えるよりも父王の懸念は深く、早急に手を打つべく思考を巡らせていたらしい。現に、この骸をつくったときには既に方針が決定していた。

そう考えれば、本来ここに転がるべき骸は他にあつたはずだ。ド

ムファナ神殿自体にヤヨイを、引いては『外』の人間を求める理由はない。仇敵たるアサヌマは別としても。

しかし、良くも悪くも世間を知らない神官だからこそ、この茶番の小道具に成り得もした。少し常識があれば、のこのこと王の間まで誘い込まれたりしなかっただろう。

ほんの十日前にランドボルグへやって来て、数日で奉職の場を動かされ、いくらもせぬうちにまたその椅子は運ばれようとしている。ロードはいつも視線を下げ、礼儀正しく見えない壁を築く娘を不憫に思った。これが娘を持つ父の気持ちか、と少しだけ感動する。

「なんだ、騒がしいな」

不意に、苛立った声に脳裏に描く顔を打ち消される。父王の目は眇められ、扉を睨んでいた。「ヤヨイがそこに」と物静かな近衛に伝えられ、王はほう、とつぶやいて大股で歩き出した。

「グレイヴ殿下のお声ですな」

「あの方が声を荒らげるとは、お珍しい」

「痴話喧嘩ですか？ 先が思い遣られますね」

大臣らが暢気なことを口々にするのを横目に、たいしん扉脇に立つ王の近衛は笑いをこらえている。訝しく思いながらも、ロードはぞろぞろと移動する王と大臣の後に従って扉へ歩み寄った。

『王族で太子の近衛騎士で、無茶の利く若い君が率先して橋渡しをしなくて他のだれにできるって？ もういいよ、だからヤヨイを僕にちょうだい』

ジェイルだ。ロードは隣にいる大臣と目を見交わした。王は扉に耳をつけ、わくわくした顔で瞳を輝かせている。……物見高い王だ。

『それとこれとは話が別だ！ 第一、おまえこそ『外』に関心などないだろうがッ！』

『失敬だな、僕はヤヨイと『外』の言葉で会話ができるよ？ 余計なお世話、騎士団と向き合う覚悟もない、ましてヤヨイのことなんか好きでもない、そんな君に――』

『それ以上の侮辱は赦さん！ 俺はヤヨイが好きだッ！！』

『やっとうたよ』

「……ロアード殿下。ジェイル殿下に、このことを？」

二列ほど先にいる、四十代半ばの大臣がだれかの頭越しに問うてきた。このこと、とは国王陛下主演による喜劇の顛末だろう。知らせる暇などあるはずもない。だからロアードは素直に首を横に振った。

「ジェイル殿下なら、ご自分をすっ飛ばしてロアード殿下へ直接の召喚があつたと知れば気づかれる。あの方が協議も決定も、意見する権利さえも放棄なさつたのは、まさにそのためだ」

中高年の塊の中から、だれかが低くそう言った。最後列にいたロアードからは、いくつかの後頭部が縦に揺れるのが見える。

ジェイルの下へはランドボルグのみならず、オージェルム全土からあらゆる情報が集まってくる。彼はそれを選び分け、系統立てて整理した後この部屋へ上げ、あるいは下へと流すのだ。

知らない事実がある、それだけでジェイルには十分。集積した情報を状況にあてはめ、ほぼ正確な答を導き出す。

王を初めとする重鎮たちは、欲しいときに欲しいものを要求するだけでいい。だがそのとき知る必要のなかった話は、永久に知る機会を失ってしまう。

協議も決定も意見もできない代わりに、ジェイルは選択する権利を得たのだ。それはある意味で、王座と比較しても遜色ない立場であるとロアードは思った。

「さても兄弟愛の強い方だ」

「いやいや、額面どおりに受け取ってはならんぞ」

爺どもは好き勝手なことを言いながら、まだ部屋の外をうかがっている。しつ、と鋭い制止をしたのは、よもや王ではあるまいな。

『いいじゃない、『外』の人間が王族と結婚した例はないよ。こういうの、君たちは『玉の輿』っていうんでしょ？ 興味ない？ それとも、興味ないのはグレイヴのこと？』

ジェイルが早口でまくし立てている。彼の常套手段だ。質問の形をとりながら立て続けに言葉を浴びせられると、回答が間に合わず思考が停止する。冷静に自分を保てばよいのに、なぜかジェイルにやられると引っかかってしまうのだ。

哀れなヤヨイ。これほど早口では、理解するどころか耳で拾うのが精一杯だろう。まして彼女がグレイヴに嫁ぐことは、決して『玉の輿』ではないというのに。

『ちよつともー、君ってほんとにお馬鹿さんだったのね。質問にはさつさと答えなよ。まあいいけど、僕は僕なりに解釈するから。だんまりさんに拒否権はないからね。もういい？ あとは親父殿の許可とるだけ？ じゃあ聞いてみよう、その扉を開けたらきつと転がり出てくるよ。ねえ、親父殿？』

高く上がった問いに、ロアードは息を飲んだ。あわててその場を離れようとしたが、両脇を固める老臣の動きは鈍い。ロアードは彼らを突き飛ばすこともできず、早くもばつの悪い思いをしてその瞬

間を迎えた。

室外の新鮮な空気が淀みと衝突する狭間の一瞬、変わり果てた神官が遺した違和感が、踵に刺さった小さな棘のように疼いた。

第四章 1・5 〽 ロード 〽 (後書き)

書いてて楽しかった。多分いままでで一番・・・。
事情が伏せ伏せでじれったいのは、仕様です。

第五章 1 　　＼ ジェイル 　　＼

他人に助言をするのは苦手だ。

ありがたい説教をくれて導き諭すよりも、一から十まで細かく指示を出すほうがまだいい。面倒でも確実だし、状況さえわかっていれば最善策を授ける自信もある。

しかしあの娘は――ヤヨイだけは別だ。良くも悪くも。

いつにもまして悲惨な筆致のしたためられた封書を手に廊下を歩きながら、ジェイルはくつくつと咽喉を鳴らした。

王の間での一件のすぐ後には、ヤヨイを城に泊めようと決めていた。動揺して、というより激怒して興奮するだろうから、老人ばかりの家に帰すのはまずかろうと思ったのだ。以降の展開は予想外だったが、結果としてヤヨイを留め置くという判断は正しかった。

（思いつきり泣かせちゃったな……）

最後に見せた顔は泣き濡れていたけれど、笑ってもいた。

頑ななまでに自分の気持ちを無視するヤヨイに、ジェイルは随分と歯がゆい思いをしていた。二言目には「お仕事ですから」と口にするが、仕事ならオージェルム国民の九割以上が持っている。子どもだって誕生から八年過ぎれば立派な働き手として、家を出される。そのだれもかれもが、ヤヨイのように自分を殺して心を閉ざしていたら、国など早晚消えてなくなるだろう。

従順な配下は嫌いではない。ヤヨイも飲み込みが早く熱心で、任務の完遂を至上命題にする気構えは、むしろ暢気で自慢の過ぎるオージェルムの民にも見習わせたいくらいだ。
だがそれも程度の問題。

ジェイルがヤヨイに恨めしげな呪詛を浴びせられながらも、無為に城中を走り回らせたり、子どもの使いのような真似をさせたのは、「それは自分にふさわしい役割か」と疑問を持たせたかったからだ。

小さく縮こまって遠慮するのが美德だとも思っているのか、ヤヨイは決して自己主張をしなかった。『外』の人間がなぜ優遇されるか、それすらも考えることを放棄していた。

王の言葉を額面どおりに受け取るならば、ヤヨイはまず真つ先に排斥される。年齢の若い女性というのは、『外』の者の中でも最も役に立たない部類だと、経験から王家は知っているからだ。

知恵もない、手に職もない、向上心もない。ただ言われたことだけをこなして親切にしてもらえるほど、甘い場所ではないのだ。

無闇に厚遇しているわけではない、すべて思惑があつてのこと。

そんなことにも考え至らず、ただただよくしてもらつて申し訳ないという顔でいるヤヨイがじれったかった。言葉で言つて聞かせるのは簡単だ。だがそれでは本当の意味で彼女のためにならないし、ひいては『外』の人間を庇護する王家にとつてもいい結果をもたらさない。

それでも、たとえヤヨイになんの能力もなくとも、それで虐げればヒロが嫌な顔をする。そして仕舞いにはアサヌマまで――。

「……………」

ジェイルはむつと口をとがらせ、立ち止まった。

またこれだ。

『外』のこととなるとすべてがヒロに帰結する、まったく業腹な話だ。

彼にはどこか底の知れない影がある。しかしそれも、もしかしたら自分が一方的に抱く、そう、劣等感のようなものから湧いている

幻に過ぎないのかもしれない。

小さくため息をつき、ジェイルは再び歩き出した。折りよくすれ違った騎士に手紙を託し、間違いなくイゼに届けるよう伝える。あとは脇目も振らずに、兄の執務室まで急いだ。

打ち合わせたわけでもなかったが、当然のようにその部屋には兄弟三人が顔を揃えることとなった。

ジェイルの部屋からすれば暖かみもあるが、グレイヴの私室に比べると格段に質素な調度の並ぶロアードの執務室。ただ義姉となる人の好みか、よく見るとそこにレース編みの敷物やらなにやら、女性の気配がただろう。

隣室で控えていた女官が、湯気を立てる茶碗を運んできた。長椅子に向かい合わせて座るロアードとグレイヴの前にそれを置き、ジェイルにうかがう視線をよこす。顎先で同じ場所に置くよう命じて立ったまま女官が去るのを待った。

訪れたほうも迎えたほうも無言でいる中、ジェイルは机の上に、掌に載るほど小さな木の椀と匙を見つけて苦笑した。

「兄上つて——ほんとに、親になったんですね」

実用に向かぬ椀の縁を指でつまみ、目の高さまで上げてみる。上質の木材に丁寧な細工。子どもが生涯食うに困らぬようにと願いを込めて、乳離れする生後一年の祝いに贈る品だ。

ロアードの娘はまだ首が据わったばかり。なんと気の早い、とあきれながらも自然に微笑むジェイルに、兄は平素より一層抑揚のな

い声で言った。

「子どもはいい。……己の生きた証だ」

それが照れ隠しであると知っていたから、ジェイルはグレイヴと目を見交わして肩をすくめた。

「だってさ、グレイヴ。アルガンダワってことは、君の息子は辺境伯だね。あそこは土地も豊かだし、のんびりやるにはちょうどいいんじゃない？ 生きた証の量産に励むといいよ」

「あつ、いや——まあ……そう、だな」

突然名指しされたグレイヴは、あたふたと目を泳がせた拳句、いたたまれないといった顔でうつむいた。耳まで赤くなる弟にロアードはやけにあたたかい視線を浴びせ、ジェイルはうんざりと天を仰ぐ。

「まったく、見てるほうが恥ずかしいんだけど。……悠長に照れてる場合じゃないでしょ？」

故意にひそめた声に、グレイヴはうつむいたままぐつと唇を噛んだ。

内心で嘆息し、ジェイルは兄の執務机と揃いの椅子に腰を下ろした。

背もたれを片腕で抱えて寄りかかり、グレイヴではなくロアードの顔色から、父王の意向を読み取る。無表情に見えて目に出やすい兄によれば、ジェイルの推測はほぼ正解。

やはり、と、ジェイルは静かに瞑目した。

手元に上がってきている情報や、政の状況、各地方の情勢など様々な要素を鑑みて、兄が自分を通さず会見に臨む相手がいたとしたら、それはドムファナ神殿以外にない。奴らはいつだって、王の間までの道がすつきりと開かれていると信じている。また王への直言が許されている客の来訪を、王子とはいえ文官の一でしかないジェ

イルに知らせる義務はだれにもない。

ゆっくりと冷めていく茶の香気に、ふと生臭いものが混じった気がした。

いまこの時期に神殿の使者を迎えた王がどういう歓待をするか、わかっていて部屋を覗いた。そして案の定、灰色と暗赤色に染まった死体がそこにあった。

ちり、と首筋に痛みが走る。

親アサヌマ派の親玉である王に、ドムファナ神殿の下っ端が自らのこのこと会いにくるはずがない。彼らがアサヌマの首級を上げ、かつての権勢を取り戻すための聖戦の旗印にしようとしていることを、王は非公式に、だが堂々と非難して憚らない。ましていま、この城にはヤヨイがいる。まだ海のものとも山のものとも知れぬ彼女を手に入れるならばその使い道は、ヒロの気を引く餌か——アサヌマの身柄と引き換える質か。

——どちらにせよ、神殿に入れ知恵をした者がいる。

その人物は神殿の中樞と深い繋がりがあり、殺されると見越して下っ端の司祭を送り込んだ。よしんば表面上思惑どおりにことが運んだとして、その人物には損がない。神殿がヤヨイに無体を働くなれば、その前に華々しく「救出」してみせ、王に貸しの一つも作ればいい。

ジェイルには、その人物の見当がついている。確信しているといっている。

そしておそらく——いや、間違いなく、王も。

（だけどなぜ、いま？ 下火になっていた神殿との対立を再燃させる意図か……目くらましか。ゼロンをやって、様子を見るか——）

何人かの手駒の中から、眠たげな顔に無精髭を絶やさない男を選

び出す。彼はヤヨイに実家を提供した縁もあり、いざとなったら素知らぬ顔で彼女に張りつかせておくにも問題がない。

往時の勢いは見る影もないとはいえ、ドムファナ神殿は依然として数千の僧兵を抱えている。アサヌマによって輝かしい神の世を穢され奪われたと信じる彼らは、殉教の決意を固めた盲目の強兵だ。暗躍するその人物の目的が王冠であり、たとえ利用されているだけだと気づいたとしても、神殿は王とアサヌマの首をとればそれでいい。後は血塗られた玉座についたその人が、神殿が再興するのを黙認する約束だけ取りつけておけばいいのだ。

なんてありがちで、陳腐な目論見だ。つまらない。

ジェイルは苛立ちを綺麗に腹におさめ、沈黙を守る弟の横顔を、気づかれぬようそつと盗み見た。凜々しい目元には、隠しきれない懊悩の影がちらついている。

グレイヴにヤヨイを娶らせる、というのは、ここ数日で王から持ちかけられた話だ。王の間諜がなんらかの情報をつかんで持ち帰ったのだろう、やっぱりそうきたか、と白けたことを覚えている。内容を詰めるまではグレイヴに知らせないでくれ、と頼んだのはジェイル自身。だがそこから少しも動かないまま、今日のようなことになってしまった。

正直、かなり危ないところだった、と父王に言われたときは肝が冷えた。

グレイヴがヤヨイを愛し、いつか結ばれることが必然であったとしても、それが王命の形をとった瞬間、ヤヨイは政略でグレイヴのものになるのだ。彼が純粹に恋をしていただけ、長く苦しむことになったにちがいない。

ヤヨイのことをからかうのは楽しいけれど、本当に悩んでヒロに

泣きつかれたら困る。書庫での晚餐からこちら様子を見ていたが、彼女も弟を憎からず思ってるようだし、だったら恋愛を先にもってこさせたほうが話が簡単だ。

もし王の間で起きているであろう事態が杞憂であつたらいいが、そうでなかったらいまこの瞬間を逃すと手遅れになる——久しぶりに頭が芯から冷えるほど思考を巡らし、強引な手段に打って出た。

手遅れになる、六年前のように。そんなことはごめんだ。
気持ちから始まらない関係は悲劇を生む。それをジェイルは、イヤと言うほど思い知ったことがあつたから。

良し悪しは別として、こうなつたからにはヤヨイにもある程度の事情を打ち明けないければならない。余計なことまで知らないように、歪んだ事実を知らないように、ジェイル自ら話して聞かせなければならぬ。

だがどこまで？ どのように？

兄弟は知らないことが多すぎたし、王には隠し事が多すぎた。王は——どこまで知っているのだろうか。もしかしたら、自分以上に強い札を握っているのかもしれない。考え付く限り、王が動いたのはこれが最初だ。しかも最初から強硬手段も辞さない構えだった。

「――」

ジェイルは不意に、暗闇に突き落とされたような不安を覚えた。夜だから暗いのだと思っていれば、実は自分の目が見えていなかったことに気づいたような心地だ。

上々の手だと思った。

暗躍する人物にグレイヴを獲られないため、またヒロの鼻先を押

さえるためにも。あんな小娘、遠くの町にでも嫁に行けばいいのに、と心底呪わしく考えたこともあるが——やはり貴重な手駒は、それとわかるよう飾り立てて派手に動かすべきだ。

いちいち読みがあたりことはともかく、この件で一気に時間がなくなつたことを思い知つた。王はこれ見よがしにグレイヴの結婚を触れ回るだろうし、水面下で繰り広げてきた熾烈な駆け引きにも、一切の情け容赦を捨てるだろう。

よりにもよつてアルガンダワと口にした王に、さすがのジェイルも度肝を抜かれた。

アルガンダワは豊かな土地で、あのあたり一帯でオージェルムの穀倉の大半を賄つていてといつて過言ではない。しかしランドボルグからはるか遠く、目が届きにくいという大きな欠点があつた。

反王派にとつて、一見のどかなばかりのアルガンダワは——とてもよい隠れ家だ。

彼の息のかつた神殿の使者を害し、その手でグレイヴを懷に抱き込み、至宝の宿る浮き草のようなヤヨイの所有を明確に主張する拳句、二人を急所に送り込むというのだから、これはもう宣戦布告といつて不足ない。

——最後の掃除、か……。

兄と小声でなにやら囁き交わす弟は、不安でいっぱいだろくに強い眼差しから光を失わない。

次代の王へ服従の証を立てさせる意味でも、それはグレイヴが自分の手でなしえなければならぬ仕事だ。

なぜならグレイヴは、あの人に近すぎる。

ジェイルは文官として丸裸になってみせることで、潔白を証明し続ける。だが武官であるグレイヴは、まして『外』への反感がそのまま国王への不信へと直結しかねない近衛騎士団に身を置く限り、その証を立てるのが困難なのだ。ことさらに派手な演出でもって、身内を裁いてみせなければならぬ。

やるとなれば、弟は必ずやり遂げるだろう。たとえ心がねじれ、血の涙を流したとしても、自ら剣をふるって全力で王の敵に挑むのだ。

だがそれも、あの人の自業自得。

ジェイルは大きなため息でももって兄弟の注意を引きつつ、最後の腹をくくった。

「さて、グレイヴ。それから兄上。ここらでお互いの手の内を見せ合わない？ 親父殿はなにをどう、説明してるのかな」

肩をすくめあえて軽く言いながら、ジェイルは笑わない瞳で二人を見据える。そうする間も、頭の中で語りかけ続けていた。

ご自分の古巣である近衛騎士団に、不和の種を植えたのはあなただ。ご自分の傀儡として幼いグレイヴの傷を抉り弄び、そのせいで親父殿の勘気に触れた。グレイヴを御しやすい手駒と侮っていたのなら、誤算でしたね。もともとの持ち主は、ご存知のとおり容赦ない御仁ですよ。

そして歴代のオージェルム王は、王位の篡奪にことのほか神経をとがらせるもの。

——ねえ、叔父上？

第五章 5・5 前編 〵 ジェイル 〵

その手紙がジェイルの手元に届けられたのは、朝議が始まる直前のことだった。

「なにそれ」

兄弟で夜通し今後について検討していたせいで、寝不足も気疲れも頂点だ。そこにきて衛士が、とにかく読んでほしいと差し出す手紙を受け取るのは億劫だった。

封をした様子もないそれを指先でつまむようにして振り返ると、兄は足元を、弟は天井をじっと見つめている。

（僕だつて気楽に落ち込みたいところなんだけどね……）

ため息の衝動を噛み殺し、後ろ手に閉めた扉の傍らに立ったまま、ぺらりとした安物の紙を封筒の中から取り出す。そこに見覚えのある稚拙な筆跡と、久方ぶりに目にする文字の羅列を読み取った瞬間、靄が風で吹き飛ぶように頭が覚醒した。

「——んのツ、やりやがった!」

思わず腹の底から怒声を上げると、二人がぎょっとした顔でこちらを見た。

「どうした、ジル」

胡乱げなグレイヴの瞳に苛立ちが増し、読めないとわかっていてその紙切れを彼の鼻先に突きつける。

「君の可愛いヤヨイがやってくれたよ! ああどうしてこう、ろくでもない……っ!」

興奮のあまり絶句し、ジェイルは兄がグレイヴに文面を読んで聞かせる声を背中に、ぱったりと床に倒れ込んだ。

家出した、ヤヨイが。今度は城どころか、ランドボルグの町そのものから逃げ出したのだ。

まさか置手紙をしただけ二度目は知恵がついた、と誉められるとも思っているのだろうか。

「ああそうだね、知恵はついたみたいだね。ランドボルグで、イゼの家に残された、『外』の言葉で書かれた手紙をこんな朝っぱらから真っ先に読まされるとしたら？——僕だ！」

突っ伏したまま叫んで、石床に拳を打ちつける。弟が驚愕の声を上げたのも同時だった。

「アサヌマって、スウェンバックか！？」

そのとおりだ。城の改装工事に絡み、いまアサヌマはスウェンバックに逗留している。

ヤヨイの真意が奈辺にあったかはともかく、目的の一つは達成されたことだろう。単純に『外』の文字を読み解くだけならば、王宮には研究所の所長もいる。あとは父王か兄、自分しかない。ヤヨイにしてみればどちらでもよかっただろうが、元警備隊長であるイゼは王の忠僕であり、息子のゼロンは研究員の隠れ蓑を纏ったジェイルの密偵。必然的に、その手紙はジェイルのもとへまっしぐらということになる。

ジェイルはいらいらと、床に転がったまま爪をかんだ。

彼女には監視をつけている。いつどこへ行こうと動向はつかめるだろうが、王が仕掛けたこの時機にかちあつては向かう場所が最悪だった。いまオージェルム国内で、最もヤヨイが近づいてはならない領域がスウェンバックなのだ。

彼女の不用意な行動が、アサヌマの身まで危うくするかもしれない。あの老人は敵の首魁の懷に潜入している真っ最中で、彼がつかんだ情報をもとに、王はスウェンバックを叩くのはいまと狙い定めだ。ただでさえ極限まで細くなっている命綱を、愚かな小娘のせい

で断ち切られてはたまらない。

どうする、と瞼の裏が白くなるほどぐっと目をつぶったとき、大きな物音がしてはっと我に返った。腰をひねって上体を起こすと、グレイヴが剣を片手に立ち上がったところだった。

「ちよっと待ちなよ、無策で飛び出すほど君がバカだと思わせないでよね」

苛立ちが音になったような自分の言葉に、弟は美しい濃褐色の髪をひるがえしてこちらを睨みつけてくる。

「いまなら間に合う！ 城外へ出ていたとしても街道で――」

「捉まえてどうするの？ ボクと結婚したくないから出て行くのか
いって、泣いてすがってみる？」

痛烈な揶揄にグレイヴの顔が強張った。唇がひきつるようにふるえる。それでもジェイルは黙らなかつた。

「いくらヤヨイがお馬鹿さんでも、二度目の脱走がどういう結末を引き寄せるかくらい承知のはずだよ。どんなに安全だとしても、ヤヨイを狭い場所に閉じ込めることに意味はないんだ、問題の解決にはならないから。僕らはみんなしてあの子を追い詰めた。いまは周りが敵に見えているのかもしれない」

言い募るほどにグレイヴは傷ついた表情を深めたが、ジェイルは自分の言葉が的を射ていると感じた。だれかの指示や命令に従うことに慣れて藁屑を詰めた人形みたいになつたヤヨイに、目を覚まして自力で立ち向かえと現実を突きつけたのだ。

ヤヨイが、会ったこともない同胞に求めているのは慰めではなく救い。足元の覚束ない自分がどう振る舞えばよいのかという、助言そのものに他ならないだろう。

昨日、アサヌマに会えばいいと勧めたのはジェイルだ。純粹に彼女の心情を思いやってもいたし、いずれはそうする必要もある。し

かし王の動きを探りながら、慶事を口実にしてランドボルグに招き、アサヌマを保護するための布石でもあった。ぎりぎりの均衡を保っているであろうスウェンバックに、ヤヨイ自らのこのこと出向けと言ったわけではない。

それでもやはり、ジェイルの失策だった。

あるとき、ヤヨイがしきりに自分の指先をこすっていたことを思い出す。皮膚ごとインクの汚れを削ぎ取ろうとするかのように、しまいには噛み千切りそうな勢いで齒を立てて。その様に違和感を覚えて咄嗟に彼女の手をつかんだが――痛みで確認しなければ、自分の輪郭すら見失うくらい不安定になっていたのだ。

（ヤヨイが唯一頼みにしているのは、ヒロ。……だけど僕は、彼を批難するようなことをあの子に話した）

前にも後ろにも動けなくなったところでアサヌマを持ち上げてみせれば、ヤヨイがどういう行動に出るか読めなくてはいけなかった。

急に疲労感の増した身体を起こして床に座り込む。ため息とともに最後の気力が吐き出されようとしたとき、もう一度扉を叩く音が聞こえた。

「……とにかく、君にはやるべきことがあるはずだよ」

肩越しに弟を見やりながら立ち上がり、扉を開ける。そこに立っていた人物の顔を見て、ジェイルは目を剥いた。衛士や騎士ではなく、ヤヨイにつけているはずの密偵の一人だったからだ。

しかし彼はジェイルが声を上げる前に素早く耳に口を寄せ、新たな情報を囁いてすぐさまヤヨイを追跡すべく踵を返して去った。

「―― 그레이ヴ」

密偵の告げた名が示す人を脳裏に思い描き、ジェイルは笑みをこぼした。

「大丈夫、ヤヨイはちゃんと自分で護衛を雇った」

事態がそう悪い方向へ転ばなかったことと、ヤヨイの身の安全が確約された安堵に、知らず口元に刻んだ笑みが深まる。

「いま考えうる中で最高の男だね。傍らにあるだけでヤヨイを守る、稀有な人材だ。彼に手を出せる人間はオージェルム中を探してもいない。いろんな意味でね」

「……だれだ」

最低の顔色のまま唸る弟に、ことさらに軽く肩をすくめてみせた。
「君の大好きなひとだよ。イゼの最後の直弟子、といったほうが正確かな」

「な——デージェズ!？」

グレイヴは嫌悪と驚愕がないまぜになった声で吐き捨てた。

「そう。君を犬つころのようにコロコロ転がして遊んでくれる、あのおにいさんだよ」

片眉を上げて目を眇めると、グレイヴは悔しげに唇をかねて顔をそむける。

常にざつくりと短くした蜂蜜色の髪、薄曇りの空の色をした瞳の剣闘士。ジェイルが知る限りだれよりも大柄で逞しい偉丈夫で、職業的に武器を持つたれよりも明朗快活な男だ。そしてグレイヴが父とも兄とも慕うガラムと、対等以上にやり合えた唯一の男でもある。弟はいままで一度も彼に勝てたことがない。技量や努力の問題ではなく、王族の傍近くに控える近衛と、各地で開催される大小の競技会を追って転戦を繰り返す彼らとでは、そもそも戦闘様式がまったく異なるのだ。

グレイヴもまともな相手と闘うのならばいい線いくのは間違いないが、幾重にも防御線を施した王宮の上層部に、不埒者が侵入する余地は端的にいつて皆無。反して競技会といえ、賞金目当てに刃物を持った破落戸つらくきだの、朝食後の腹ごなしに里を襲撃してきたよう

な野盗だのがうようよしている。対戦者を地に沈めればそれでよしの、なんでもありだ。

そしてディーズという男は、オージェルム全土の競技会で、ここ数年敗けなしの競技者だった。なおかつ、生家の格も周囲を威圧する材料として余りある。

自分らとの関係は少々複雑だが、彼ならば、ヤヨイを託すに不足ない。

（でも、なんでいまここに？ どうして早朝の市場でヤヨイと遭遇する？）

ジェイルは鈍く痛む目をこすりながら、途切れそうになる思考を紡いだ。

ランドボルグは今年の大競技会の主催番ではないし、この地方の競技会は新年の祝賀と春の大祭の折にしか行われない。——とすれば、なんらかの理由で彼を呼びつけただけがいる。

「……………」

指の隙間からちらりと弟を盗み見ると、苦い記憶に打ちのめされたまま立ち尽くしている。

それも父王の布石のひとつ、とするなら？

国内を転々とする剣闘士は、各地の情勢にとっても詳しい。賞金の額が変動すれば領主の懐具合も窺うし、試合のない日は朝から酒場で与太話に花を咲かせて情報収集にも勤しむ。

もしもディーズが王の招きに応じてランドボルグに現れたのだとしたら、彼はヤヨイについても詳細を知らされているはずだ。当然、スウェンバックに後がないことも。

ならば——。

「——グレイヴ」

ジェイルはゆっくりと胸の前で腕を組み、顔をうつむけたまま視

線だけで応じる弟を見据えた。

「ヤヨイはデイズに任せよう。多分、彼は君がすべきことを成すまでの時間を稼いでくれるはずだよ。ヤヨイがスウェンバックに入るのを遅らせ、すべての片をつけるだけの時間を、ね」

瞬間、携えた剣をつかむグレイヴの手に力がこもった。

「躊躇する暇はないよ、もしまかり間違ってヤヨイが叔父上に会ったら厄介だ」

王様の弟、王子たちの叔父、アサヌマのいる城の主——あの人は様々な肩書を上手に使い分けて、お馬鹿さんのヤヨイはきっと『いいひと』とか『すごいひと』とか単純な括りに入れてしまう。

ダナン・ハルオ・スウェンバックという人は、姿形がジェイルととてもよく似ていた。ともにジェイルの祖母——父と叔父の母から受け継いだ髪の色、瞳の色、どこか女性的な顔立ち。やや細身でそれほど上背がないところも。直系の王子として双方とも長髪が義務づけられていることもあり、遠目に見ただけでは区別がつかないほどだ。慣れるのが苦手なくせに人恋しいヤヨイは、あっさり親近感を持ってしまっだろう。

叔父の顔と名前をヤヨイの中に刻み込むのは得策ではない。あの人の、生きた思い出を植えつけてはならないのだ。——グレイヴのために。

ジェイルは首を振って気を取り直し、グレイヴにこれからの行動を指示した。

王の近衛であるアガット・ダブノードを初めとする数人を帯同すること。すぐにスウェンバックへ向けて立つこと。遠回りでも街道を避け、人目につきにくい道を選ぶこと。必ず夜更けを待って、顔を見られないように入城すること。

「君がそこにはまらずい状況に陥ったとき、入る姿を見た者がいなければ出る姿を見られなくても問題ない。逆に知られたほうがよ

ければ、皆が寝静まった頃に到着したと堂々と話せばいいだけだ、王の子としてね」

黙ってジェイルの言葉を聞いているグレイヴは、まだ少し青ざめた顔をしていたものの、瞳には強い光が戻っていた。

「それから、ガルムを連れて行つて」

「ガルムを？」

「準備をして正門へ向かうよう指示するから、今後は絶対にそばから離すんじゃないよ。——それと、叔父上には『ジェイルはすべて見ていた』と伝えて。いいかい、『すべて見ていた』と、間違いなく伝えるんだ」

グレイヴの肩越し、静かに成り行きを見守っていた兄が首をかしげるのが見える。六年前、ガルムと叔父に確執があったことは知っ
ていても、そこにどうジェイルが絡んでいるかまでは思い至らない
のだろう。

無理もない。ジェイルは本当に、物陰からただ見ていただけなの
だから。

基本的に表情に起伏のない兄は、もの問いたげな眼差しだけを送
つてくる。しかしその疑問に応える時はいまでもなく、ジェイルも眉
を上げて視線を返すに留めた。

「……あの方も黙って首をくれるほどお人よしじゃない。でもなに
を言われても怯んじゃダメだ。叔父上を討つのは君、必ず君でなけ
ればならない」

息を飲むグレイヴの肩に手を置き、力づけるようにぐっと握る。

「僕は書記室に行つて、怪しい書類の原文を検めるよ。騎士団も納
得の、ちゃんとした大義名分を探してみる。手はずが整ったら、僕
もスウェンバックに向かう。あつちが領主を失って動揺するし、
反王派がどう動くかもわからない。味方は少ないけど、自分の身を
守つて。親父殿の息子であることを忘れずに、しっかり立っている

んだよ」

添えた手を離すと、グレイヴはひとつ大きく息をついて歩き出した。扉の前で兄に一礼して歩み去ろうとする彼を見送っていたが、ふと思いついて呼び止める。

「グレイヴ！」

扉の向こうへ消えかけた影が振り返り、ジェイルはつかつかと早足でそちらへ歩み寄った。そしてヤヨイが残した紙の表を手の甲ではたき、最後の一文を指し示す。

「ここ、これは君宛ての伝言だ。どういう解釈をするかは君次第だと思っけど、持っていきなよ」

胸に押しつけられた紙切れを、グレイヴは戸惑った様子で受け取った。好きな女の手紙を読めない、と言うのは悔しかろうと、彼がそれを口にする前に教えた。

「ありがとうって書いてある。——さあ、行って！」

第五章 5・5 後編 〵 ジェイル 〵

軽く握った拳で、こつこつと顎の先を打つ。

考える。ヤヨイのおかげで釣瓶が落ちるような勢いで動き出した事態についていくため、考えることをやめてはいけない。

近衛の再編成がすむまでここに、と出立の挨拶にきたアガットに請われたとおり、兄は長椅子に腰かけて膝に肘をつき、窓の外を眺めている。きつと兄も、ジェイルと同じように寝不足の頭に苛酷な負荷をかけつつ思案に暮れているのだろう。

ヤヨイめ――。

忌々しく首を振って彼女の残像を脳裏から消しつつ、イゼのもとに残した手紙については評価してやろうじゃないか、そう思った。

自分から見れば手間をかけさせられただけ業腹だが、ヤヨイにしてはよくやった。すぐさま探されたくはないが、行先は知らせておきたい。ならば『外』の文字でそれを記したのは正解だ。ジェイル側にしても、解読できずとも情報があると見たから密偵たちは闇雲な動きを控えた。

おそらくはデイージズの同行を伝えに来た者が、昨夜の不寝番。家を忍び出たヤヨイを追って二人の邂逅に遭遇し、ひとまずデイージズに彼女を預けて注進に及んだのだろう。置手紙はイゼが別の者に託し、だから報告が前後したのだ。

（それにしても、味を占めて今後も読めない言葉を使われたらお手上げだ……奴らにも『外』の文字を教えておくべきかもしれないな）
仕事が増えた、と重苦しい息をついた瞬間、それが閃いた。

――暗号。そうだ、『外』の文字は秘密文書にびったりじゃない

か。

カタだのヒラだのいう文字は組み合わせで文になるから解読が容易だが、確かカンだかヤンだかいったあの複雑な文字ならば。

顎にあてた手を、ぐつと握りしめる。

アサヌマ以前、いまは女大公として立つ伯母と恋仲になりドラングヴァイルを目指した『外』の男は、彼女との蜜月を目前にしてドムファナの僕に殺された。悪神の言語を民草に広め、輝けるドムファナを冒瀆せんと企んだ咎で。

以来、王は彼らの庇護を公言するとともに、『外』の者にオージェルム公用語の習得を厳命してきた。同朋を失いたくないヒロは手を尽くしてヤヨイに言葉を教え込み、だからこそ彼女は短期間で大体のオージェルム公用語を覚えたのだ。

しかしあの神がアサヌマに追い払われて久しく、双方の価値が逆転したいまなら――。

「これだ……」

知らず、つぶやきは口からこぼれ落ちた。

あのなんの取り柄もない馬鹿娘の使い道。よくぞ書記室。文官の司の従者。

ヤヨイがこの地で職を求め、ヒロがそれを相談するならば相手はジェイルだ。いくらグレイヴが望もうと、彼の持つ伝手は武官職にしかない。必然的に自分の下、当たり障りのない書記室の下っ端あたりにその椅子を空けるほかなかった。

しかし実際には、ヒロが望む形に整うまでに時差があった。ジェイルが役に立たない『外』の小娘を疎んじて、書記室の雑用に回したからだ。そこでヒロから異例の横槍が入り、ヤヨイはたった五日で書庫掃除からジェイルの従者――本人がそう認識しているかは知らない――になった。

知っていたではないか。ガルムの存在に動揺したヒロが、父王の打つ手を予測しそこなうであろうことを。

そしていま、ジェイルの懸念は現実のものとなった。

王は、ヤヨイをグレイヴに——ドムファナを排して民衆の支持を得た『外』の娘を、無自覚に反王派の手先となっていた騎士団に属する末王子に、娶らせると宣言したのだ。

汚れ役であり壁役であったアサヌマ、『外』の者の顔役であるヒロ、そしてオージェルム王家と『外』との懸け橋になるヤヨイ。これで王家は完全に『外』を支配下に収めることに成功するだろう。少なくとも、民らは安心してそう信じるにちがいない。

（ちがう……双方の価値が逆転した、いまだからだ）

蛇行して行先を見失いそうになる結論を、ジェイルはひとまず飲み込む。

かつて世の支配権を王と二分していた神は、アサヌマに肅清される以前から民らの信奉を失っていた。

王が恐れているのは、ドムファナの復活ではない。『外』の者が、民衆の心を残らず奪い去ること、だ。——死に果てた神に成り代わって。

だから騎士団の横柄に見ぬ振りをした。ランドボルグにヤヨイを招くにあたり、彼らの思想を矯正しようとはしなかった。城内で力ある彼らがそういう態度でいる限り、親『外』派も表立って彼女を厚遇することはできないとわきまえた上で。

騎士団の連中は王によって、『外』への不信と不満を育てる苗床として温存されていたのだ。ただそこに、叔父の撒いた種のほうが早く芽吹いてしまっただけのこと。

——待て。ではなぜ親父殿はアルガンダワを俎上に載せた。

ドムファナの僕が王の間で殺されたのは、なぜだ？ 王の気まぐ

れ？　ではその血も乾かぬうちにグレイヴにこの件を持ちかけたのは？

「――兄上」

低い呼びかけに顔を上げた兄に、ジエイルはまっすぐに目を向けた。

「ドムファナの司祭を処刑するとき、なにか不審なことはありませんでしたか。親父殿の様子、室内の雰囲気、なんでもいいんです。引つかかったことは？」

唐突に感じたであろう問いかけに、兄は慎重に青味の強い碧の瞳に瞬きをかぶせる。

「……いや？」

ではやはり、王のいつもの気まぐれか。そう落胆しかけたとき。

「ああ、ある。待て、そう……なにか、なにか――」

言いよどんでから、すぐに小さくうなずいた。

「首が飛ぶ寸前、奴は確か、話がちがうと言った」
「話？」

「そのときは、どうせ上の神官連中にうまく言いこめるめられて狼の巣穴に放り込まれたのだろう、くらいに思ってたんだが……いまにして思えば、奴はこちらを向いてそれを叫んだのではなかったか。なにか妙だなと感じたのはそのためだ」

「――」

ぱちん、と綺麗に金具がとまる音が頭の中で聞こえた。アルガンダワ。グレイヴの結婚。叔父の謀反。すべてが一直線につながった。

司祭の首を刎ねたところまでは、おそらく王の手癖だ。しかし「話がちがう」という発言で、王もそれに気づいた。気づいてからが早かった。

親父殿は、ドムファナの鼻先を押さえ、ヒ口を懐柔するためにヤヨイをグレイヴに与えたのではない。無論それもあるだろう、だが

与えたと表明したことにまず第一義があつたのだ。奴らはヤヨイを使ってグレイヴを完全に取り込む企てを持っていたのだから。

ジェイルは六年前、露見しかけて未遂に終わったダナン叔父の叛逆を知った。ミツエの凄惨な死によって覆い隠されてしまったその計画が当時のままの姿を保っていたのなら、遠からず叔父はグレイヴにこう囁いていただろう。ヤヨイが欲しければ王を排除し、己で立てと。

そのために彼を騎士団の堅牢な檻に閉じ込めて腐らせていたものの、最後の一押しに足る理由があのだにはなかった。皮肉なことに、閉鎖的で頑なな騎士団にいたからこそ、グレイヴに万難を排しても手に入れないものなど生まれようがなかったのだ。文字通り突如として降って湧き、グレイヴの心をつかんだヤヨイの存在は、叔父にとって僥倖だっただろう。

そして首尾よくことが進めば、詰めの一手でグレイヴを弑逆者として背中から斬り捨て、自分が黄金色の椅子におさまるつもりだった。国教に戻す約定でも交わしておけば、かつての権勢を取り戻せと総本山にせっつかれているドムファナの僕など、いくらでも顎で使える。

王と『外』を憎むドムファナ、王の座を狙う者。両者にとって最も忌むべき結論——それが、グレイヴがヤヨイを娶ってアルガンダワに赴くことだ。

王と『外』が結託し、彼の地に巢食った反王派勢力と、そこに寄生するオージェルム国内のドムファナの残党を始末しようと手を伸ばす、かに見える。あの瞬間、王の頭に閃いた絵の完成図だ。見せる相手は決まっている。

「——兄上」

知らず深く俯いていた顔を振り上げると、兄はじつとジェイルを

見つめていた。

多少の色味はちがえども、兄も自分も父王譲りの金髪碧眼で生まれてきた。母の家系に似たというだけで、末の弟は血の涙を呑む道を行かねばならなくなった。

孤独だった幼い彼は、王の弟である実の叔父に慈しまれ救われたと信じたし、それがゆえに、長らく恩人と慕った人をその手につかねばならないのだ。

兄弟の運命を分けたのは、当人たちにはままならぬものの、些細なちがいが。だが持つ者と持たざる者では、その意味合いは天と地ほども異なった。

苦いものがこみ上げるのを奥歯で搦り潰し、ジェイルは眉間に力を込めて声を張った。

「騎士団だけじゃない、王の間にも裏切り者がいる。内通者がいます、昨日の朝、あの場にいた全員の名を教えてください」

胃の腑が焼ける思いを噛み殺しながら、己の遣る瀬無さは横に擱く。

ランドボルグに潜む虫、アルガンダワから湧き続けるドムファナ、そして——スウェンバック。三者が手を組んでいる証拠が挙げれば、先ほどグレイヴに告げたことが実現できる。自らの手を血に染める彼に、せめて大義名分を。

兄の書き物机から無造作につかんだ紙とペンを突きつけ、ジェイルも最後の答えを必死で導き出そうと考えた。ランドボルグのグレイヴと、スウェンバックに赴任したダナン叔父、その長らくの接点はどこだったか。

グレイヴは叔父本人とも親しくしていたが、それを隠れ蓑にしてヒ口と手紙を遣り取りもしていた。一度叔父に手紙を送り、そこから落下地点に届けてもらっていたのだ。その頻度はガラムからの報告で、月に数度とジェイルも聞いている。スウェンバックのほうか

落下地点よりはるかに遠いが、騎士団の手前、それくらいの手間はかけざるをえなかったのだろう。

ここだ、と、ジェイルは確信をもって睨む。

グレイヴに宛ててヒロのもとを離れた手紙が叔父の手元に渡り、反逆を示唆する書面を同封されたとしても、二人にはわからない。公人である弟がからめば、いかに密書と念を押しても残念ながらそうする機会はいくらでもある。

そして叔父からの手紙なら、書記室を通過する際に確実にガルムの目にとまるはずだ。王族であるダン・叔父とグレイヴ、双方に深い関わりと情を持つ彼が書記室長だからこそ、使えた手段だ。ガルムは六年前の真相を知らず、哀れにも叔父を欠片も疑ってはいなかったから、わざわざ私信を開封して内容を検めたりはしなかったのだろう。

とすれば、叔父の手先はいつどこでそれを見ることができる？

「――」

兄が緊張感のある角ばった文字でいくつもの氏名を書き記しているのを、ジェイルはただ瞳に映して爪を噛んだ。少し伸びていたそれが、ぶちりと音を立てて千切れた瞬間、踵を鳴らして駆け出していた。

「ジル!？」

世にも珍しい兄の驚愕の声にほくそ笑む余裕もなく、ジェイルはただ一人、自分だけに許した孤高の証である漆黒の文官服の裾を蹴立てて、静まり返る廊下に飛び出した。扉の外にいた騎士たちが目を剥いてぼかんと口を開ける間抜け面も、数えきれないほど往復した城内の道も、かつてない速度で後ろへと流れていく。

ガルムが兄の近衛騎士隊長の座を退いたとき、早晩グレイヴが後釜に据えられるであろうと当時の自分も予測した。まだ子どもだっ

たけれど身分は仮にも王子であつて、しかし所属が騎士団であるがゆえに警護をつけられないグレイヴを、兄と一緒にたに監視することが出来るからだ。

ならばその時点で、宿舎のどの部屋が与えられるかも必然的に決まってくる。

正門を指して下層へと飛ぶように駆け下りると、ちょうど大階段下のホールで目当ての人物をつかまえた。

いまにもスウェンバックに向けて出立するところらしく、ガルムは文官服を脱いで簡素な旅装に身を包んでいた。グレイヴの姿はな이가、一人になったかつたか、あるいはアガットらと既に表に出ているのかもしれない。

「ガルム！」

下男やら役人やら旅芸人やら、散歩がてら寄つたらしい孫連れの老爺やら、とにかく有象無象がひしめくホールを見下ろす階段の途中で、腹の底から声を上げて呼び止めた。もちろんその場のすべての注目を集めたが、気にかける必要はなかった。

「殿下——」

振り返つたガルムは、大きく目を瞠つてその場に立ちすくんだ。常に冷静沈着で、いまはもう死んだ女以外のだれにも心を動かさないと思つていた男を驚かせたことに、なぜか自分で無性に腹が立つ。

複雑な心情を突き詰めるのは後回しに、血相を変えたジエイルに歩み寄ってくるガルムに大声で問いかけた。

「宿舎の施錠をどうしていた、騎士団の自室の施錠を！」

ガルムは金緑色の瞳に戸惑いを浮かべつつも、自分はしていた、と当然の返事を寄越した。苛立ちながら、不測の事態に備えて合鍵があつたはず、それを預けるならだれだとさらに問いを重ねた。

「騎士団の総責任者、ゴドワーン殿に」

「それはいまも？」

「慣例ですが、おそらくは」

望む答えを得たジェイルはぎゅっと握った拳の内、歪に千切れた爪が柔らかな皮膚を傷つける痛みで正気を保ち、滾るような勝利の予感に似た興奮の中、小柄で博識な『外』の老人を思い出していた。彼はかつて教えてくれたのだ。

こんなときに叫ぶなら、その言葉は「エウレカ」と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4944k/>

along the way to her

2011年11月6日06時21分発行